

神戸市看護大学

いちかんダイバーシティ看護開発センター

ICHIKAN NURSING DEVELOPMENT CENTER FOR DIVERSITY

2021年度 実績報告書



刊行に際して

神戸市看護大学学長
いちかんダイバーシティ看護開発センター長
南 裕子

神戸市看護大学は、2019年4月に法人化して新たな歩みを始めました。公立大学法人神戸市看護大学は、「保健医療に関する質の高い教育研究活動に取り組み、その成果を絶えず地域社会に還元すること、および豊かな教養と看護の専門性を備えた実践力のある看護人材を育成することを通じて、学術の発展と市民の保健、医療および福祉の向上に寄与すること」を目的としています。この目的に向かって持続的・発展的に活動できる全学的な中核機関として、2021年4月に『いちかんダイバーシティ看護開発センター（以後、本センター）』を開設いたしました。

本センターには現在、地域連携グループ、健康支援グループ、在宅ケア支援グループ、国際交流グループ、保健師キャリア支援センターグループ、地域保健支援グループ、臨床看護連携グループ、および災害看護グループの8つのグループがあります。それぞれのグループが看護の専門分野を活かしながら、組織横断的に取り組むことで、年齢、性別、人種、国際、宗教、価値観、ライフスタイルの異なる人々が、共に生きる地域社会の中で、個人を尊重しつつ、コミュニティのもつ豊かな可能性の実現を目指して活動しています。

今回刊行しました「神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター2021年度実績報告書」は、開設初年度の各グループにおける事業の成果をまとめたものです。

おりしも新型コロナウイルス感染症が全国に拡大しましたが、神戸市においては第1波から第6波まで、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の対象となりました。感染者の数が増加するなかで、感染拡大予防対策や医療崩壊の危機への対策、新たなケアシステムの開発など、果敢な挑戦が求められました。ご家庭や軽症者療養施設、病院、福祉施設などにおいて、発症と後遺症に苦しまれた個人やそのご家族に対して、ケアにあたった現場の看護師や保健師等の保健医療福祉現場の職員もまた、厳しい経験を重ねてこられました。

本学では、本センターが中心となって保健所や医療機関、軽症者療養施設、在宅ケアなどの現場やワクチン接種会場などでさまざまな活動をさせていただきました。本センター開設の準備から今までの2年間は、パンデミックとなったこの感染症から多くの学びをしてきたと思います。その成果を今後に活かし、看護を通してよりよい社会の実現をめざして、今後も活動を継続していけるよう努力してまいります。

この実績報告書をご覧ください、忌憚のないご意見やご批判をいただければ幸甚に存じます。

目 次

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要	3
------------------------	---

グループの活動

I 地域連携グループ	9
II 健康支援グループ	33
III 在宅ケア支援グループ	39
IV 国際交流グループ	57
V 保健師キャリア支援センターグループ	59
VI 地域保健支援グループ	65
VII 臨床看護連携グループ	67
VIII 災害看護グループ	69
業績一覧	75
センターの組織	79



いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの概要

1. 本センター設置の趣旨

我が国では、人口減少、少子高齢化が進行中であり、2040年に高齢者人口がピークを迎えます。2040年を展望し、誰もがより長く元気に活躍できる社会の実現を目指して、住民の「健康寿命の延伸」と「多様な就労・社会参加」とともに、「医療・福祉サービスの改革による生産性の向上」への取り組みが必要とされています。本センターは、このように多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組み、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与することをめざして設立しました。

2. 沿革

神戸市看護大学は、阪神淡路大震災発災後1年後の1996年に開学し、兵庫県及び神戸市の復旧・復興とともに歩んできた歴史を持ちます。2006年度の文部科学省現代GPの助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に始まり、現在に至るまで地域に根ざした教育・研究・地域連携活動を行ってきました。

2009年度に、地域社会における健康支援の推進と、教育・研究における地域との交流を発展させることを目的として、「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」が開設されました。2012年度には、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を全学的に展開しました。さらに、2013年度には、文部科学省の拠点事業である地（知）の拠点整備事業（Center of Community:以下COC事業）で、「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」に取り組み、2014年度に、地域連携教育・研究センターが開設され、西区および須磨区を中心に地域貢献活動を継続し、地域住民との交流、健康増進活動等を行ってきました。

これまでの取り組みを発展させ、2021年4月にいちかんダイバーシティ看護開発センターが開設されました。尚、これまでの地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行います。

2006年～	文部科学省の現代GP「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の助成を受けた事業の実施（～2008年度）
2009年	健康支援地域連携センターの開設
2012年	健康支援地域連携センターが、従来の国際・地域交流委員会を統合して国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」となり、地域連携、国際交流、教育・研究活動を展開
2013年	COC事業における「地域住民と共に学び、共に創るコミュニティケアの拠点づくり」への取り組み（～2017年度）
2014年	地域連携教育・研究センターの開設
2021年	いちかんダイバーシティ看護開発センターの開設

3. 理念

本センターは、年齢、性別、人種、国籍、宗教、価値観、ライフスタイルなどが異なる人々が共に生きる地域社会の中で、一人ひとりの生存、生活、尊厳を尊重し、個人と、個人が集まってつくるコミュニティの持つ豊かな可能性を実現することを目指します。そして、センターおよび本学では、日本学術会議で提案されている地元創成看護学の実装を目指しています。センターでは、地域連携、生涯教育、国際交流、及び産官学連携、防災・減災支援を5つの柱として、多様化・複雑化する地域社会のニーズの変化に応じて、市民と協働して、地域の健康課題の解決に取り組みます（図1. センター概念図）。そして、この教育研究成果を絶えず市民に還元し、生活の質の向上に寄与します。さらに、地元住民に加え、専門職、自治体、関係機関（職能団体や民間企業）と共にこれらの分野の課題解決に取り組みます。コミュニティとの協働を通じ、新たな知見を得て、ローカルに働きかけた経験を蓄積します。そして、この知見をグローバルに展開し、国際的な人・文化交流ネットワークの拠点を構築します。



図1 いちかんダイバーシティ看護開発センターの概念図

4. 目標

本センターでは、神戸市を中心としながら、兵庫県下の様々な地域を地元ととらえ、公立大学法人として、教育研究活動の成果を地域社会に還元することを目標とします。

(1) 地域課題の解決や健康創造都市戦略等を担う学術研究の推進

神戸市と地域の抱える保健・医療・福祉分野の様々な政策課題に対して、産官学連携の強化を図り、課題解決に資する研究に取り組みます。そして、国内外に向けて研究成果を発信し、各分野の学術的発展に貢献するとともに、政策提言等により、健康寿命の延伸、健康格差の縮小を目指す健康創造都市戦略の一翼を担い、保健・医療・福祉施策の充実に寄与します。

(2) 市民との連携・交流による地域の保健医療への貢献

地域と連携した教育研究活動として、企業、市民、市内の大学、神戸市民病院群をはじめとする医療機関、福祉施設等と連携した教育研究活動、地域貢献活動を推進するとともに、その成果を積極的に市民へ還元します。そして、市民に信頼され、貢献できる大学として、公開講座等の実施、大学施設の開放等を行うことにより、市民の生涯学習に寄与し、市民との交流を促進します。さらに、地域の看護人材の供給のために、看護職者の就業継続支援や復職支援、新たな学びのニーズに対応したリカレント教育を充実させ、看護職者の生涯学習の拠点としての役割を果たします。

(3) 国際都市神戸にある大学として、学生の異文化理解の推進と海外の大学との交流の推進

多様な価値観や文化的背景、生活習慣等に配慮できる国際的な感覚を有した人材育成を行うことを目指します。異文化への理解やグローバルな視点と感覚を培うため、海外研修による異文化体験や地域で暮らす在日外国人との交流、外国の大学との国際交流を推進します。さらに、グローバルな視点を培う国際交流の推進のため、海外からの留学生の受入れを推進するとともに、国際化が進む保健・医療・福祉分野において、医療介護分野等で働く外国人のキャリア開発を支援します。

5. 組織図

いちかんダイバーシティ看護開発センターは、センター長及び副センター長のもと、地域連携、生涯教育、国際交流、産官学連携、防災・減災支援という大きな5つの柱を掲げ、8つのグループ事業を展開します。グループは、地域連携、健康支援、在宅ケア支援、国際交流、保健師キャリア支援センター、地域保健支援、臨床看護連携、災害看護から成ります。各グループの活動はプロジェクト型とし、各グループにリーダーを配置して、本学教員が自発的に参画し、全学協働で行っています（図2）。

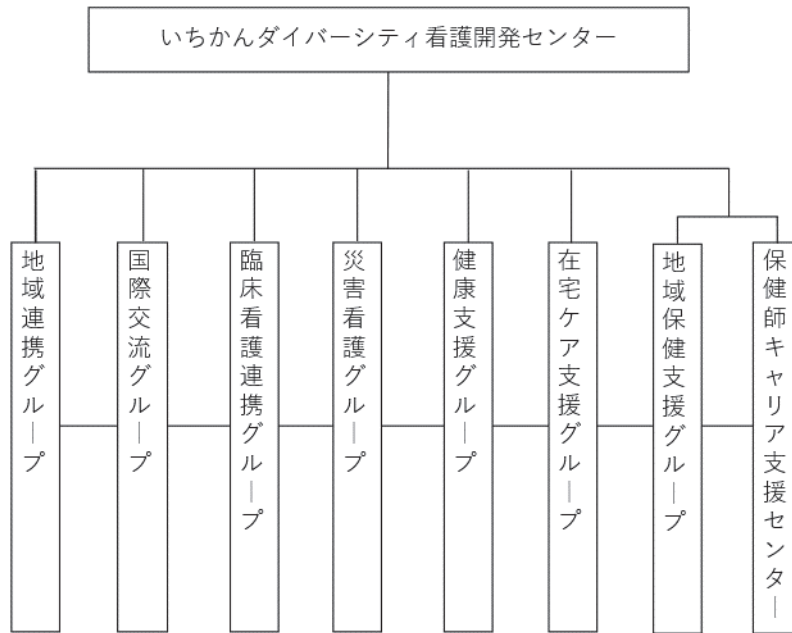


図2 いちかんダイバーシティ看護開発センターの組織図



グループの活動

I 地域連携グループ

1. グループ概要

神戸市看護大学は、2006年に文部科学省現代GPの助成事業「地元住民と共に学び共に創る健康生活」に採択された後、2009年に「神戸市看護大学健康支援地域連携センター」を開設し、2012年には国際的な交流活動も含めた「地域連携・国際交流センター」へ、2014年には「地域連携教育・研究センター」へと、名称の変更とその活動を発展させながら、地域住民との交流や健康増進活動等の教育・研究・地域貢献活動を継続して行ってきた。

2021年4月にこれまでの本学の取り組みをさらに発展させるために「いちかんダイバーシティ看護開発センター」が開設されたことに伴い、これまで行ってきた地域連携・教育研究センターの活動は、いちかんダイバーシティ看護開発センターの地域連携グループが継続して行うこととなった。

2. グループメンバー

グループリーダー	片倉 直子
グループメンバー	丸尾 智実
	片山 修
	水川真理子
	苫田ひとみ

3. 地域連携活動

(1) コラボカフェ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子

1) 概要

本学は、2012年に神戸市子育て支援事業「ひろば型」に参画し、コラボカフェを開設した。名称である「コラボ」は、Collaborationの略であり、「大学の教職員と学生が地域住民および関連機関と共に」を意味し、「カフェ」は「子育て中の親子が一休みできる」場として機能することを目指して名づけられている。

2) 目的

コラボカフェは、大学施設を利用した学生と住民の参加を通して親と子が健康に育つための子育てを支援すること、および学生が生活を支援できる看護職として成長すること、また、それらにより大学の発展に寄与することを目的としている。

3) 実施事業

- a. 子育て親子への場の提供と交流の促進
- b. 子育て等に関する相談、援助等
- c. 地域の子育て関連情報の提供
- d. 子育て及び子育て支援に関する講習
- e. コラボカフェを活用した授業及び研究の実施

4) 運営方法

対象者：生後2か月かつ、首がしっかりすわってから3歳児までの未就園児とその保護者

開催日時：毎週 火・木・金 9時45分～12時15分、13時～15時30分（予約制）

2020年に引き続き、2021年も新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、4月27日から5月13日と、8月21日から10月1日まではコラボカフェの閉鎖が余儀なくされた。前述の期間以外は、感染予防対策を講じて予約制とし、感染状況に応じた利用人数の制限を行って、来所型のコラボカフェを開催している。

スタッフ：保育士3名が見守りを行い、保護者からの相談に応じている。

5) 実績（利用状況）

2021年1月から12月末までのコラボカフェの開催日数は101日、年間の延べ利用者数は、保護者が454名、子どもが496名であった（表1）。このうち新規登録者は160組であった。1日平均利用者数は、保護者が4.5人、子どもが4.9人と、2021年も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、閉鎖と利用者の人数制限を行ったため、経年別にみると利用者数は減少している（図1）。新規登録者を経年別でみると、コロナ禍前よりは減少しているが、2020年よりは増加した。（図2）。一日あたりの平均利用者数は8.2名であった。保護者から保育士への相談は随時受け付けており、2021年は7件の相談があった。夫婦間の

I 地域連携グループ

育児の相違、同居の姑との関係、離乳食・食物アレルギー、夜泣き等について、母親から保育士に質問があり、都度相談に応じている。

学生の延べ参加者数は 10 名で、大学院生が授業や研究で利用している。新生児乳幼児援助の授業では、乳幼児の発育発達の観察や、乳幼児を育児する親の思いを理解するために、コラボカフェ利用者に一人 30 分程度話を聞いて助産師の役割について学び、母子との交流を深めていた。

表 1 月別の延べ利用者数（人）（2021年1月～2021年12月）

	保護者	子ども	新規登録	学生	備考
2021年 1月	31	32	25	2	
2月	39	40	27	0	
3月	43	61	25	0	
4月	47	51	10	0	4/27～閉鎖
5月	22	23	6	0	5/14～再開
6月	65	71	19	0	
7月	57	63	12	0	
8月	15	15	1	1	8/21～閉鎖
9月	0	0	0	0	閉鎖中
10月	49	50	17	7	10/2～再開
11月	46	48	7	0	
12月	40	42	11	0	
2021年 計	454	496	160	10	

I 地域連携グループ

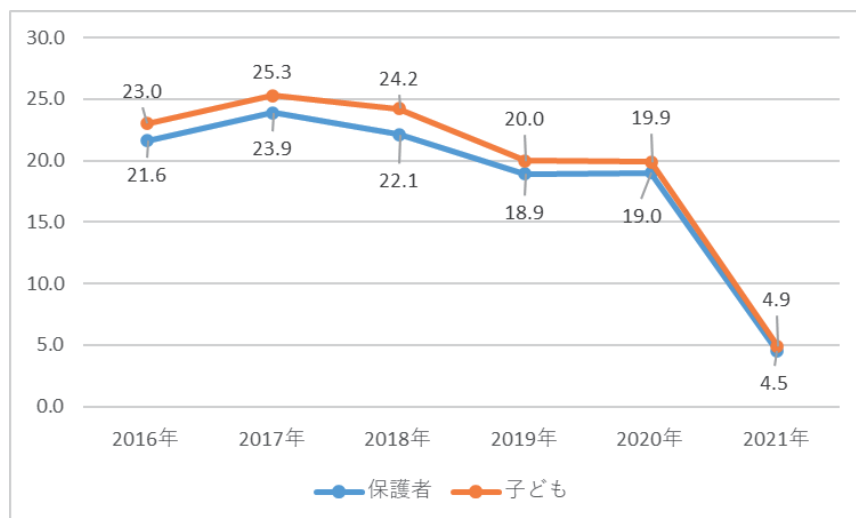


図1 一日あたりの平均利用者数の推移（2017～2021年）

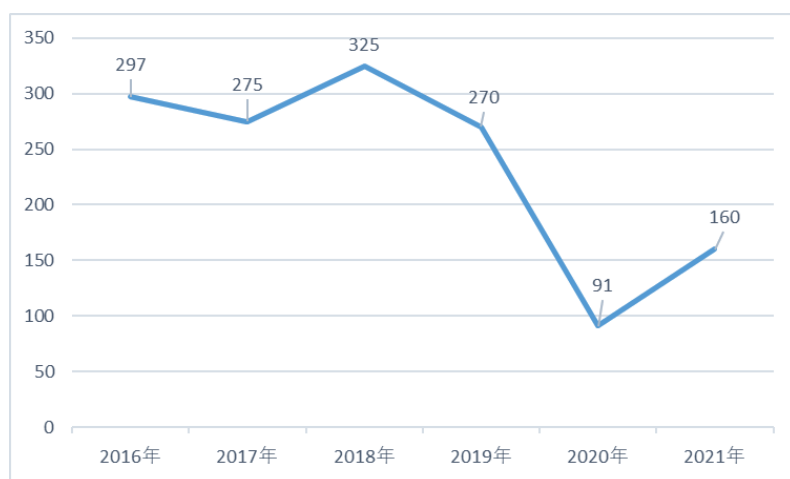


図2 新規登録者数の推移（2017～2021年）

6) 教員と保育士が企画・運営したプログラム

2021年度は、4つの来所型イベントを企画したが、感染拡大により、「こどもの靴選び」については中止した。その他3つのイベントについては、後述のとおり、オンライン開催に変更して開催した。オンライン開催に際し、事前説明会を実施したところ、「Zoom操作の説明が分かりやすく、使いやすかった」と感想が聞かれ、スムーズに視聴頂けた。また、「家で子どもをみながら視聴できるので、参加しやすかった」「顔出し無しで良かったので、授乳中でも助かった」「当日は予定があったので、後日ゆっくり見られたことが良かった」「子どもが起きていたら集中して聞き取れないので、夜にゆっくり視聴できてよかった。寝ている子どもの様子を見るために席を外すことができ、聞きたいところは何度も巻き戻して観られたのでよかった。」と好評であった。

「母乳と卒乳、離乳食の話」

5月に開催予定であった本イベントは、コロナ禍の緊急事態宣言下であったため、開催

を中止したが、母乳と卒乳、離乳食についての悩みを抱える母親からの開催の要望が多かったため、7月20日にオンラインでのライブ配信と、録画のオンデマンド配信で開催したところ、16名の参加がみられた。本学ウィメンズヘルス看護学分野の井上ちはる先生が講義に続いて、事前に頂いた質問に回答した。「自分の方法があっているのかな？と不安に思いながら、日々を過ごしていたので、色々なお話を伺えて良かった」「食が細くて量を食べないことを心配して、食べさせようと必死になっていたけど、量よりも食べる楽しさを子供にもっと伝えていきたい。卒乳は子供のタイミングで自然でいいとわかって安心した」という感想を頂き、満足度の高い会となった。

「子育てについて」

9月22日に、コロナ禍の緊急事態宣言下で、来所型のコラボカフェを閉鎖している中、「子育てについて」の来所型イベントを、オンラインでのライブ配信と、録画のオンデマンド配信に切り替えて開催したところ、15名が参加された。臨床心理士・公認心理師の田渕富美先生が講義に続いて、事前にいただいた質問（卒乳について、赤ちゃんの睡眠について、二人目の出産による長子の赤ちゃんがえりについて、子どもの好き嫌い（偏食）と遊び食べについて）などに回答した。

「様々な子育ての悩みに具体的に答えてもらえてよかった」「自分の悩みだけでなく、他の方の悩みも伺えて、今後の参考にします」「同じような事でみなさん悩まれているんだなと分かって安心した。また月齢の高いお子さんの悩みも聞いて、これからこういう事もあるんだと分かって良かった」「コロナ禍でなかなか話す機会も少ないので、貴重な機会となりました」という感想を頂き、アンケート協力者の全員が「満足できた」と回答された。今後自身で取り組みたいこととして、「決断事について、良い点と悪い点を紙に書き出すことを早速やってみました」「細かいところ(退行しているとか)は気にせず、夫に協力してもらいながら役割分担する」「まずは自分の安定を心がける」「もう少し周りに頼ること」などが挙げられ、研修が生活の中で活かされていることが分かった。



「子どもの心の発達～子どもの認知機能の発達について～」

5月に開催予定であった本イベントは、コロナ禍の緊急事態宣言下で、開催を中止したが、10月5日に、オンラインでのライブ配信と、録画のオンデマンド配信にて開催した。かささぎ心理相談室・本学非常勤講師の山口修一朗先生が講義に続いて、事前にいただいた質問に回答した。23名が参加され、「動画などがありとてもわかりやすかった」「勉強になり興味深かった」「乳幼児は母からの安心、安全感をもとに、不安定な世界を体験、探索する力が身につくというのがよくわかった」などの感想を頂き、満足度も高かった。「質疑

I 地域連携グループ

応答の時間を設けたことで、質問をしたご本人の悩みが解消されただけではなく、他の参加者にとっても、「共通の悩みがあったので、参考になった」「将来どう対応したらよいかわかった」と、コロナ禍の緊急事態宣言下で出かけられず、ストレスのたまりやすい環境の中での開催で、同じ年ごろの子をもつ親同志が、共感でき、励みとなる機会となった。

7) 保育士が企画・運営したプログラムについて

毎週木曜日にふれあい遊びとして、手遊び、絵本の読みきかせ、紙芝居、パネルシアター、楽器遊び、ダンスなどを保育士が実施している。その他に、来所型の季節のイベントとして、7～8月の火・木の午前中に、水遊びを行った。12月には、クリスマス会、3月にはひなまつりを開催した（表2）。保育士が開催するイベントは親子からとても好評で、予約受付の開始間もなく予約の枠が埋まる状況である。



表2 2021年度 保育士によるイベント一覧

日付	タイトル・内容	参加数
7月15日 AM	水遊び	4組
8月5日 AM	親子1組にタライを1つ用意して、距離をとって遊ぶ	4組
12月15日(水) AM, PM	クリスマス会 マジックショー、手遊び、体操、ゲーム、ハンドベル演奏 マラカス作り、サンタによるツリー帽子のプレゼント他	20組 (10組 ×2回)
3月2日(水)	ひなまつり	5組
3月3日(木)	飛び出し箱と歌、エプロンシアター、体操 楽器遊びとリトミック、ハンドベル演奏、お雛様作成他	5組



8) 評価

昨年度に引き続き今年度も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、来所型のコラボカフェを閉鎖しなくてはならない期間が生じた。来所型コラボカフェは、感染予防として、利用人数の制限を行っているため、利用人数は例年より少ないが、予約開始とともに、申し込みの連絡があり、親子が楽しみに参加されている。また、コラボカフェ来所時に、家族との関係や子育てについて、保育士との会話の中で相談がみられている。企画したイベントについても感染拡大に伴って、中止を余儀なくされたが、利用者の要望に応える形で、閉鎖期間中に行えることを模索し、オンラインでの講義を開催した。今年度は計3回のオンライン講義を行ったが、回を重ねる毎に参加者が増加し好評であった。

9) 今後の課題

来年度も、新型コロナウイルスの感染の影響が予想される。コロナ禍にあっても、安全に安心して利用できる、子育ての場の提供を継続する。また、今年度初めて開催したオンラインイベントについても来所型が難しい場合には、来年度もオンラインで開催することを考慮し、人との交流の機会が減り、子育て世代の不安や悩みが高まる時にあっても、その不安を軽減できるようにイベントの開催方法の検討を継続して行うことが課題である。

(2) まちの保健室

在宅看護学分野 丸尾智実

神戸市看護大学「まちの保健室」は、兵庫県看護協会神戸西部支部の活動として、2005年12月から地域住民を対象に実施している。出産・子育て、生活習慣病やこころの健康、介護等、健康に関する様々な健康上の課題に、協力分野の看護教員が相談に応じることで、地域住民の健康維持・増進を目指すことを目的としている。現在は、地域住民一般の方々を対象にした『健康支援』、子育て中の保護者とその子どもを対象に健康相談や子どもの発育測定、参加者間の交流促進を支援する『子育て支援』、こころの悩みを抱えている方を対象に看護相談を行う『こころと身体の看護相談』、もの忘れや認知症に関する不安や困りごとへの支援を行う『もの忘れ看護相談』の4拠点で活動している。以下、表3に今年度担当した教員を示す。

表3 2021年度まちの保健室担当者一覧

拠点活動	担当教員
健康支援	第2回：野寄、船木 第3回：片倉、丸尾、宇多、大瓦 第4回：岩本、山下、藤岡、遠藤 第5回：新澤、澁谷、稲垣、岩井、富田、花井
子育て支援	山本、二宮、半田、清水
こころと身体の看護相談	関口、船越、山岡、坂口
もの忘れ看護相談	秋定、坪井、石橋、西村
まちの保健室運営委員会	丸尾、池田、片山、山下、秋定、関口、野寄、花井、山本

『健康支援』

健康支援は、今年度5回の開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大状況により1回が中止となった。その他の4回については、日程やオンラインでの開催等の変更を行いながら実施することができた。以下に、表4に今年度の開催状況の一覧を、また、各回の開催概要を記す。

表4 2021年度の『健康支援』開催状況

回	日程	テーマ	参加人数(人)	スタッフ数(人)
1	5月20日	排尿の諸症状とケアについて	新型コロナウイルス感染症の 拡大状況を鑑みて中止	
2	6月25日	熱中症と脱水症 ～体験談からのお話～	14	2
3	9月3日	訪問看護 Part.5 コロナ禍にお ける人とのつながりと健康	10	4
4	10月28日	生活体力を 測ってみませんか？	57	27 (学生20人含む)
5	12月7日	自分をケアするところのトレ ーニング～マインドフルネス入門～	7	5
合計			88	38

第2回：熱中症と脱水症～体験談からのお話～

新型コロナウイルス感染症拡大により新しい生活様式の中、マスクの着用が欠かせない生活となった。このことから、本企画では新しい生活様式における熱中症対策をテーマに、熱中症と熱中症に関連する脱水症について体験談を交えながらの講座とした。実際に体験談を交えての講義内容であったため、参加者は興味深く聞かれ、大事な用語等を書き留め残しておられる様子が伺えた。また、全ての参加者が「大変満足」「満足」と回答していた。満足度の理由として「漠然と理解していたことがはっきりした」「断片的に知っているつもりであることが具体例でわかった」「熱中症と脱水症の概略がわかりやすかった」と回答しており、熱中症についての知識はあるものの今回の講座により知識が深まったものと思われる。さらに「体験談ほど人のところにすっと入るものはない」「体験談が参考になった」という回答があった。このように体験談をふまえた講義内容が身近なものとなり予防行動をとる意識づけになると考え、今後も取り入れて企画していきたい。

第3回：訪問看護 Part.5 コロナ禍における人とのつながりと健康

本企画は、当初対面とオンラインによる講座を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う緊急事態宣言が発令中であったため、ZOOMによるオンライン講座に変更して行った。内容は、コロナ禍による精神的影響とそれに対する生活習慣や人とのつながりの重要性について1時間程講義をし、休憩を挟んで、30分参加者からの質問に回答したり、参加者同士の意見交換であった。参加者は、現在行っている生活リズムを保つことがコロナ禍の精神的影響に対応していることや、新型コロナウイルス感染症に関する情報収集を少し過剰にしているのではないかと、日常生活について振り返り語っていた。

第4回：生活体力を測ってみませんか？

本企画では、本学の教員や保健師選択課程の4年生が参加者の身体計測や体力測定を行い、測定結果をもとに各参加者への健康づくりについてアドバイスを行った。参加者は血圧・脈拍測定と問診を受けた後、ストレッチを行い、身長、体重、体組成、握力、足指力、長坐位や開眼（閉眼）片足立ちの測定をした。

新型コロナウイルス感染症予防対策として、①30分に最大15人の完全予約制、②例年より測定項目を少なくし比較的短時間で測定を終える、③実施者及び参加者がマスクの着用や手指消毒、機器の消毒を徹底する、④会場となる体育館の換気を徹底して行う、といった工夫を実施した。これらの工夫から、会場内が混雑することなく感染症予防対策に対して不安という意見も特にみられなかった。



終了後に参加者からは、「毎年参加し、データを比較して楽しんでいます。いつまでも続けたいです」、「毎日努力していることが数字にあらわれるので励みになります」、「優しく対応していただき、自分でも健康に気を付けていこうと思うことができました」など、企画に満足を得られた内容の意見が多数みられた。実施後のアンケートでも、本企画に対し「とても満足」あるいは「まあ満足」と97.8%（44人/45人）が答えたことから、参加者にとって満足できる内容であったと考

えられる。一方、「測定内容を増やしてほしい」という意見もあった。

今回の参加者は約半数が過去に本企画に参加経験のあるリピーターであることから、本企画の需要は本学周辺の地域で高いことがうかがえる。参加者からの意見や感染予防対策を踏まえてどのような形で実施ができるか次年度に向けて検討していきたい。

（写真：相談の様子）

第5回：自分をケアするところのトレーニング～マインドフルネス入門～

講義では、マインドフルネスの定義やマインドフルネスな状態について説明した。その後、普段は無意識に行っている「食べる」「歩く」「呼吸する」をマインドフルに行うなかで、「今」の自分の身体の感覚に注意を向ける体験をしてもらった。参加者は、「コロナ禍で体調を崩しやすくなっていた」「マインドフルネスに関心があった」などを動機とし、参加されていた。実施後のアンケートでは、全員が「自身の体の感覚や心の状態に気づく機会となった」、「自身のケアやリフレッシュにつながった」と回答した。同様に、全員が今後の「自分の生活に取り入れられそう」と回答し、「この保健室をきっかけに自分への思いやり、他者への思いやりを深めたい」との自由記述がみられた。

『子育て支援』

地域における育児支援の場を提供する取り組みとして、子どもに関する相談を行うとともに、参加した親子同士の交流が図れる機会を提供することを目的に2006年から年6回実施してきた。2020年度からは新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況に併せて、オンラインでの相談対応に切り替えるなど、開催方法を変更しながら実施してきた（予約制、一部、対面相談の実施）。オンラインでの子育て相談では、事前の予約を受けてオンラインでの相談を受けられるようにWeb会議ツールを使用する体制を整えた。相談時間を最大1時間とし、予約状況に合わせて教員3～4名で対応できるようにした。

今年度も昨年同様に新型コロナウイルス感染状況に配慮しながらオンラインでの子育て相談を併用しながら活動したが、利用者は少ない状況であった。子育て相談については、実際の子どもの様子を見ながら相談を受けるほうが利用者も相談しやすいと考えられる。次年度は、引き続き新型コロナウイルス感染症の拡大状況に留意しながらも、できるだけ状況に応じて対面で実施できるようにしていく。子育て中の親の生活を考えると、時間が制限されることも参加者が少ない要因のひとつであると考えられるため、時間枠を取り除くなど気軽に参加してもらえる開催方法を検討していく。

表5 2021年度の『子育て支援』活動状況

年	日程	活動	参加者数（予約数）
2021年	5月12日	対面から変更して オンラインでの子育て相談	1人（2人）
	6月30日	対面での子育て相談 （コラボカフェ内）	1人（2人）
	9月8日	対面から変更して オンラインでの子育て相談	1人（1人）
	11月17日	対面での子育て相談	予約なし
2022年	2月16日	対面での子育て相談	予約なし
	3月9日	対面での子育て相談	予約なし

『こころと身体の看護相談』

「こころと身体の看護相談（以下、看護相談）」は、心身に不調のある方とそごご家族が気軽に相談できる地域場および精神看護専門看護師を目指す大学院生の教育の場として、2007年6月より月1回（木曜日の午後・都合により曜日の変更有）、完全予約制の1回12人の相談枠で実施している。今年度の9月の看護相談は、新型コロナウイルス感染症に伴う緊急事態宣言が発出中であり、大学より対面による相談を中止するよう指示があったため中止となった。また、新型コロナウイルス感染症対策として、昨年度と同様に相談者の検温、手指消毒とマスクの着用を徹底した。また、会場の換気とソーシャルディスタンスの確保を行った。

I 地域連携グループ

今年度の相談件数は58件、うち新規相談は19件、一旦終結していたが再開した相談は2件、継続の相談は37件であった。相談者の年代の内訳は10歳代が1.7%、40歳代が30%、50歳代が6.7%、60歳代が21.7%、70歳代が40.0%であった。性別の内訳は男性が18.3%、女性が81.7%であった。例年と比較して、60歳代以上の相談者が増加している。

相談内容は自分の心身の悩みが最も多く、次いで家族の心身の悩み、家族関係の悩みが多くみられた。新型コロナウイルス感染症の拡大により、友人や家族との関わり、余暇活動といったコーピングを行うことが困難になったことから相談者は悩みを抱えやすい状態となっていること、そのような相談者にとって、感染対策が徹底されており気軽に相談できる場として看護相談のニーズが高まっていることがうかがえた。

表6 2021年度相談件数（58件）の内訳

相談申し込み（件）			相談終結 （件）	相談人数 （延べ）
新規	再開	継続		
19	2	37	10	58

表7 2021年度相談者（58件）の年代内訳

年代	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代
件数（%）	1 (1.7)	0	0	18 (30.0)	4 (6.7)	13 (21.7)	24 (40.0)

表8 2021年度相談内容内訳（複数回答）

相談内容	対人関係 の悩み	家族関係 の悩み	自分の心 身の悩み	家族の心 身の悩み	日常生活 について	その他
件数 （%）	3 (4.6)	5 (7.7)	40 (61.5)	15 (25.0)	1 (1.5)	1 (1.5)

『もの忘れ看護相談』

「もの忘れ看護相談」は2012年3月より開設し、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるよう、知識の普及啓発のためのミニ講義と教員が対応する個別相談を実施している。2021年度の「もの忘れ看護相談」は4回の開催を予定していたが、COVID-19感染拡大により、開催できたのは11月のみであった。ミニ講義を30分間実施し、希望者については、ミニ講義終了後、個別相談を実施した。

表9 『もの忘れ看護相談』参加者数と運営人数（人）

※（ ）は個別相談利用者

開催日	ミニ講義参加者数			運営人数		
	65歳以上	65歳未満	計	教員	ボランティア	計
11月19日 （木）	2 (2)	2 (2)	4 (4)	4	学部生 2 あんしんすこやか センター職員 1	7

I 地域連携グループ

唯一開催できた11月の参加者数は、感染症流行の影響もあり、昨年度と同様に少なかった。講義では、「認知症と診断されても自分らしくどのように生きていくか」について、認知症の人やその家族の実際の声や生活上の工夫等の具体的な例を紹介するなどし、参加者が講義で得た情報を今後の生活で活用できるように工夫した。

個別相談は、4組ともすべてが新規の相談者であった。相談者らは、最近気になり始めたが身近に相談する人がいない、電話相談などはハードルが高いことを理由に「もの忘れ看護相談」を利用されていた。主な相談内容は、相談者自身のもの忘れに対する不安と受診の必要性に関するもの、認知症の家族の対応に関するものであった。今後も継続的な支援が必要なケースについては、次回の「もの忘れ看護相談」への参加や、同分野が担当している「神戸市看護大学もの忘れ看護電話相談」の利用を勧めた。また、相談者の同意が得られれば、もの忘れ看護相談に参加している近隣のあんしんすこやかセンターの保健師に繋ぎ、相談者が地域で安心して暮らせるよう大学とあんしんすこやかセンターが連携した支援活動を行った。

アンケート結果からは、参加者のミニ講義・個別相談に対する満足感は高く、もの忘れ看護相談は正しい認知症の知識・情報を確認する、不安がある今の自分の状態を確認し安心感を得たり先の対策を考えられる場となっていることがうかがえた。

COVID-19 感染流行は今後も長引くことが予測されるが、開催方法を工夫しながら対面による「もの忘れ看護相談」を開催し、地域で暮らす人々にとってももの忘れや認知症に関する相談が気軽にできる場としてあり続けたいと考える。

(3) トライやる・ウィーク

自然科学分野 片山 修

1) 概要

トライやる・ウィークは、兵庫県下の中学校2年生が地域を学びの場に、体験を通して、自ら学び、考え、体験する教育の一環として実施されている。生徒一人一人の興味・関心に応じて「職業体験」「農林水産体験」「文化芸術創作体験」「ボランティア・福祉体験」などの社会体験活動が5日間各事業所にて行われる。それによって、学校ではできない様々な活動に挑戦し、豊かな感性や創造性を高めたり、自分なりの生き方を見つけたりすることができるよう支援し、ともに生きることや感謝の心を育み、自立性を高めるなど「生きる力」を育成することが目的とされる。

2) 実績

2021年度トライやる・ウィークでは、本学において、大山寺中学の3名に対して3日間の日程で実施された。内容は、施設見学、事務業務補助、図書館での業務補助、コラボカフェでの子どもの見守り補助などを行った。詳細内容は下記に示した。また教科において、看護学授業見学、専門基礎科目実験準備・実施など本学全体を知る幅広い体験をした。

日程	内容
11月8日(月)	受講体験：在宅看護概論
	キャリア支援室業務補助
11月9日(火)	図書館業務補助
	コラボカフェ業務補助
	事務局作業補助
11月10日(水)	事務局作業補助
	実験授業準備補助

(4) こうべ生涯学習カレッジ (コムスタ神戸)

基礎看護学分野 玉田雅美

神戸市内にある 12 大学による大学連携セミナーとして、各校の教員の様々な専門分野を生かした講義を「こうべ生涯学習カレッジ」として提供しており、本学も平成 24 年度から参加している。

今年度は、2022 年 2 月 28 日 (月) 13:30～15:00 に「生活習慣を見直す～生活を振り返ってみましょう～」をテーマに講義を行った。参加者は 50 名程度であった。講義中心であったが、ご自身の 24 時間の過ごし方を振り返ったり、フレイルの兆候やリスク要因がないかをご自身でチェックしたりする時間を設け、生活を振り返っていただいた。新型コロナウイルスの感染拡大以前よりも活動量や人と関わる機会が減っていることが実感できた、活動することの大切さを再確認できたという意見が聞かれた。

(5) UNITY 講座

言語科学分野 山内理恵

1) 概要

神戸研究学園都市大学交流促進協議会 (UNITY) の公開講座は、市民の生涯教育を振興するとともに、加盟校の最新の研究成果を市民に還元することを目的として、1999 年度から開催しており、各加盟校がそれぞれの研究分野のテーマに即して、原則として毎年 1 講座 (5 回シリーズ) の企画・実施をしている。

2) 実績

2021 年度公開講座日程：『リベラルアーツへのいざない』

(土曜 14:00～15:30)

テーマ	日程	講師
第 1 回 文学と医療の交差点 - 「嵐が丘」にみられる悲嘆	7/10 (土)	山内 理恵 教授
第 2 回 科学技術の倫理(1) : 先端科学技術と倫理	7/17 (土)	藤木 篤 准教授
第 3 回 科学技術の倫理(2) : 科学技術と想像力/構想力	7/24 (土)	古賀 高雄 神戸大学人文学研究科 非常勤講師
第 4 回 Language and Cultural Differences: West and Japan - どこが違う? 西洋と日本の言語文化 -	7/31 (土)	Crosby Adam 准教授
第 5 回 情報工学入門 - プログラミングによる頭の体操	8/7 (土)	片山 修 准教授

(6) もの忘れ看護電話相談・もの忘れ看護相談オンラインミニ講義

『もの忘れ看護電話相談』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、西村康子

「もの忘れ看護電話相談」は、認知症患者およびその家族が社会から孤立することなく、安心して自宅での生活を継続できることを目指し、新型コロナウイルス感染症の流行を受け、2020年度から新たに取り組みを開始した活動である。2021年度の「もの忘れ看護電話相談」は、8月をのぞいて毎月1回の相談日を設定し、1人20分の事前予約制として広報した。相談者は、7名のべ10回の看護相談を行った。そのうち1回は相談者の希望によりオンライン会議ツール「Zoom」を用いた。

相談の中には、認知症と診断されているケースはないことから、日常生活上の些細な疑問や不安を相談できる場をもっている方が少ないことが伺えた。また、遠隔地からの相談希望もみられた。さらに、もの忘れの症状への不安を抱えながら仕事に従事している方の相談からは、対面での「もの忘れ看護相談」に比べ、周囲の目を気にせず匿名性を保ちやすい相談先であることも、利用のしやすさに繋がっていると考えられた。今後も、身近に相談できる場として、広報の工夫や支援のあり方を検討していきたい。

『もの忘れ看護相談オンラインミニ講義』

老年看護学分野：坪井桂子、石橋信江、秋定真有、西村康子

いちかんダイバーシティ看護開発センター：水川真理子

「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は、新型コロナウイルス感染症の流行による外出自粛が続く中でも、もの忘れや認知症の人とその家族が地域で安心して暮らし続けられるように2021年3月に開始した活動である。2021年度の「もの忘れ看護相談オンラインミニ講義」は下記日程で14時～15時で開催した（表10）。なお、IT機器の活用に不慣れな高齢者でも気軽に参加できるよう、希望者には事前に参加方法についての講習を実施した。

表10 『もの忘れ看護相談』開催日およびテーマ

開催日	テーマ	参加者数(人)	運営人数(人)	
			教員	学生ボランティア
5/21(金)	もし認知症と診断されたら	16	5	4
9/10(金)	認知症になっても進行を予防する12のこと	10	5	4
10/22(金)	認知症と診断されても自分らしく生き方を決める	15	5	4

ITを活用し、適切な支援をすることで、高齢者であっても問題なく参加できることが確認できた。活動低下が認知機能に及ぼす影響が明らかになる中で、感染の心配をすることなく、自宅から気軽に参加できるオンラインミニ講義は、社会参加の機会ともなっていると考えられた。アンケート結果からは、参加者のミニ講義に対する満足度は高く、継続して参加する方が多かったことから、その満足度は推察できる。今後もニーズに合わせて、様々な方法を活用しながら、活動を発展させていきたい。

(7) 神戸市フレイルサポーターによるフレイルチェック事業

公衆衛生看護学分野 岩本里織、山下 正、藤岡神奈、遠藤真澄

1) 概要

本事業は、神戸市（公益財団法人こうべ市民福祉振興協会に委託）が、フレイルサポーターを育成し、フレイルサポーターが地域の中でフレイルのリスクがある高齢者を把握し、早期に予防活動を支援することにより、将来的に要介護状態に陥ることを予防するものである。本学は、保健師課程4年生が「a. 地域住民の介護予防事業において、保健師による介護予防の事業・施策の立案、実施における関係機関との連携や調整、評価の役割を学ぶ」、「b. フレイル事業に参加・協働し、住民の主体的介護予防実施について学び、住民の主体的活動の推進のために保健師がどのような役割を担うかを考える」、「c. フレイル事業に参加した地域住民に対して、介護予防に関する相談を実施できる」、の3点を目的に参加している。

学生は、事前準備として、11月11日に神戸市介護保険課の保健師より、「神戸市における介護予防システム構築と保健師の役割」について講義を受け、神戸市の高齢者・介護予防の現状と課題、フレイルへの予防対策、住民組織活動の意義、保健師の役割について学習し、当日に向けて準備を行った。

2) 実績

2021年11月25日に、神戸市介護保険課、こうべ市民福祉振興協会、神戸市フレイルサポーター、本学保健師課程4年生が、本学の近隣に居住する住民9名を対象に開催した。新型コロナウイルス感染症の流行もあり、参加者を少人数にするとともに、検温・消毒・十分なスペースの確保等、感染予防に十分留意した体制で実施した。

内容としては、こうべ市民福祉振興協会、神戸市フレイルサポーターの方が、フレイル予防導入の講話、自己簡易チェック（サルコペニアの簡易指標である指輪つかテスト、栄養・口腔・運動・社会性・こころのチェック）、深掘りチェック（口腔・運動・社会参加のフレイルチェック）、計測後の講話であった。オーラルチェックについては、感染予防の観点からアンケートへの回答のみとした。本学学生は神戸市フレイルサポーターの方と共に誘導、受付、計測（血圧、握力、身長、ふくらはぎ周囲長、開眼片足立ち、筋力量）、保健指導を一緒に実施した。実施後には、参加者が本事業への参加を通して、自分自身の健康を見直したり、健康を増進するような機会になっていると感じることができた。また、本

学で継続してほしいとの声も上がっていた。

3) 教育上の効果

学生は、参加者にフレイルチェックの結果と相談内容を伺い、介護予防に関するセルフケア能力の向上ができるように、パンフレットを用いながら一緒に考えることができた。また、こうべ市民福祉振興協会との連携や、神戸市フレイルサポーターという住民組織の力を信じ、事業立案・実施・評価のすべてのプロセスにおいて、住民組織が主体的に活動できるような支援をすることで組織の力・自主性を向上させることを学んだ。さらに、神戸市フレイルサポーターの生き活きとした活動から、本事業は地域住民が地域で健康づくりの担い手として活躍する場であり、活動を通じて社会参加することが、自らの健康寿命を伸ばすことにもつながっていることを学んだ。

4) 今後の課題

次年度においても、引き続き、新型コロナウイルス感染症の発生状況に応じた対策を十分に検討し、その上で実施していく必要がある。

(8) プレパパプレママセミナー

ウィメンズヘルス看護学分野 高田昌代、嶋澤恭子、井上理絵
岩崎千歳、蚊口理恵、井上ちはる

1) 概要

大学院助産学実践コースの助産診断技術学Ⅰの授業の一環として実施している。セミナーの目的は、神戸市の地域住民（妊婦とそのパートナー）に妊娠期から子育て期を見越したセルフケア獲得への意識を高められるような、集団指導の実践的技術を助産学実践コースの学生が習得することである。

2) 実績

今年度は第1回目を2021年9月4日（土）、第2回目を2022年2月6日（日）に開催した。第1回目のテーマは「Let's Enjoy パパママライフ ～ここらとからだと家族の準備～」として、大学院2年生が中心となり、オンライン相談会を開催した。初めてのオンライン相談会であったが計11組の参加があり、参加者からは「個別に相談ができ、不安が解消された」「妊婦健康診査時に聞けずにいた些細なことでも話しやすかった」などの意見が寄せられ、コロナ禍におけるオンライン相談会のニーズがあることがわかった。第2回目のテーマは「あなたらしく楽しいお産と子育て」として、大学院1年生が中心となり開催した。新型コロナウイルス感染症防止対策を徹底した上で、抱っこ・沐浴体験、妊婦体験などを行った。総勢16組の参加があり、参加者からは、「コロナ禍で沐浴体験や抱っこなど夫に体験してもらえて良かった」「(妊婦体験では)重量感があり、日常の生活も大変なことがよく分かった」など好評であった。

3) 教育上の効果

セミナーの目的・目標、テーマについて、学生たちが意見を出し合い、一貫性のある内容に構成することで、全員が同じ方向を向いて実践・評価まで行うことができ、集団指導の実践的技術を習得できた。

(9) 命の出前講座

ウィメンズヘルス看護学分野 井上理絵

1) 概要

命の出前講座は、思春期にある地域住民に対して健康教育を実施する健康支援活動として始まっており、大学院助産学実践コースの学生が「思春期健康教育論」の授業の一環として毎年実施している。対象者は小寺小学校4年生、5年生の児童である。

2) 実績

今年度の第1回目は、2021年10月21日(木)、5年生70名に対し実施した。授業内容は「体の発育と命の誕生」をテーマとし、教員が企画の要点作成と講義を担当、出産の劇は大学院1,2年生が主体で行った。参加した児童の感想からは「お母さんが苦勞しながら産んでくれた」「生まれてきたどんな子も大切」と一人ひとりが大切な存在であることを実感している様子が伺えた。第2回目は10月28日(木)、4年生64名に対して実施した。大学院2年生が授業の企画・運営を担当し、学部学生も参加した健康教育であった。授業内容は主に「思春期に起こる体の変化(月経・精通)」であり、男女の体の違い、発育の個性性について学びを深め、月経時の対処法では実際に生理用品を用いた演習を行った。授業後の感想では、「生理が不安だったけど知ることによって安心した」「人によって個人差があるんだな」など体の変化を知り、変化を受け入れる準備につながっていた。

対面での授業であったため、新型コロナウイルス感染拡大防止を十分に配慮して実施した。実施時は全員マスク着用を厳守、密閉を避けるため窓は解放、教室内では密を避け一定間隔を保ちながら講義・演習を行う工夫をした。

3) 成果

昨年、この授業に参加した大学院生は、4年生から5年生へと成長した児童に触れ合う機会となり思春期の頃の身体と心の変化について考えることができていた。今年度、初めて参加した学部生は、助産師が行う思春期教育の重要性を再認識し、助産師活動の幅広さを学ぶことができていた。

生理用品を実際に用いた演習は、女子児童にとっては月経に対する具体的な方法を知る機会となり、それは「安心」につながっていた。男子児童には、男女による第二性徴の違いを学ぶ機会となった。

(10) 竹の台ふれあいまつり

ウィメンズヘルス看護学分野 井上理絵

2021年度は COVID-19 の影響を受け中止となった。

(11) HAT 神戸復興住宅における出前講座

慢性病看護学分野 池田清子

1) 概要

本講座は 2003 年よりボランティア活動を展開している HAT 神戸復興住宅において、連合自治会より高齢化が急速に加速している地域高齢者の介護予防にむけた健康講座をおこなってほしいとの要望があり行っている事業である。

2) 実績

2021 年度も 2020 年度と同様に COVID-19 の影響をうけ、出前講義は実施していない。出前講座の代わりに夏や新年に手書きのカードを送り、脇の浜あんしんすこやかセンターの職員の方に配布して頂いた。また対面での活動は傾聴のみとし、参加者の人数制限をおこなった。2021 年度は 11 月 13 日（土）と 2022 年 3 月 5 日（土）に開催した。参加者はこれまで本ボランティア活動に来所されていた住民 6 名であった。さらに本年度は中央区赤い羽根募金助成金を頂き、対面での傾聴ボランティアに加えて新たに電話による訪問を行った。電話訪問の対象は 6 名で、学生が月 1～2 回電話訪問を継続している。人と話す機会が少ない独居の高齢の住民にとって学生からの電話は「生活の良い刺激になっている・孫と話しているようでうれしい」等の反応から、概ね肯定的に受け止められていることがわかった。

4. コラボ教育

教育ボランティア導入授業

在宅看護学分野 片倉直子

1) 教育ボランティア登録状況

2021年4月に活動継続への意思確認ができた今年度の教育ボランティア登録者数は75名である。

2) 教育ボランティア導入授業の実際

2021年度実施予定の教育ボランティア導入授業は、学部12科目であったが、コロナ禍による学生生活レベルの制限があり、実施されたのは、「基礎看護学実習Ⅰ」「在宅看護論」「災害看護学Ⅰ」「フィジカルアセスメント」「健康生活支援学実習」の5科目であった。

2021年度に実施できた科目の1つである「在宅看護論」は、家族の介護経験がある教育ボランティアにインタビューを行い、家族介護者に必要な支援を考える演習を行っている。2021年度は感染拡大防止のために学生の登学日数に制限があったことから、対面ではなくオンラインでグループインタビューを行った。教育ボランティアの方々には自宅から、もしくは大学に来校いただき、学生は自宅からオンラインでインタビューを行う方法とした。インタビューは1時間と短い時間であったが、どのグループもインタビューが盛り上がり、また学生は、改めて家族介護者への支援の必要性を実感して、当該科目の中で自分が立案した看護計画に新たな視点を加えることができた。

3) コラボ教育学生評価の開始について

法人中期計画のなかで、「教育ボランティアの方々との連携をさらに強化し、学生と地域住民とのコラボ教育を推進する」ために座談会をする旨計画されていたが、コロナ禍で2020年度は実施できなかった。しばらくこのような状況が続くこと、また、教育ボランティアからは2019年度に行われた座談会で、コラボ教育に対する学生からのフィードバックを希望されていた。そこで、2021年度から、「コラボ教育学生評価」をコラボ教育時に実施し、教育ボランティアへ、教育ボランティアニュースレター等でフィードバックすることになった。質問項目は下記のとおりで、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4段階できいている。

【設問 1】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、いつもよりことば使いや態度に気を付けましたか

【設問 2】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、いつもより良い意味で緊張して授業に臨めましたか

【設問 3】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、地域で生活する人々の理解がより深まりましたか

【設問 4】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、看護を提供する人々をケアする際に心がけることについての理解が深まりましたか

【設問 5】教育ボランティアさんが授業に参加されることで、大学や自宅近隣における地

域のイベントに参加してみようという気持ちが膨らみましたか

【設問 6】教育ボランティアさんの講演や意見、感想によって、看護職を目指すモチベーションがあがりましたか

4) 教育ボランティア交流会

2022年3月2日(水)13時30分から14時30分まで、教育ボランティア交流会を2年ぶりに感染予防対策を万全にしたうえで、本学の講義、演習や実習などご協力頂いている教育ボランティアの方々と本学教職員・学生が参加し開催した。教育ボランティア24名、教職員22名、学生3名の参加があった。

学生3名は、教育ボランティアの方々との関わりで得た学びと、学びを今後実習や職場でどのように活用していくかといった今後の展望について発表した。講義や演習で教育ボランティアの方々から学んだこと、具体的に実習でその学びを展開した様子、就職を前にさらに深めた学びを、語っていた。教育ボランティアからは、地域住民と学生が学び合う機会に関するご意見や、学生の学習に貢献したい、学生と地域住民が互いに良い影響を与え合うような関係性をつくっていききたいといった思いが語られた。

5) 教育ボランティアニュース

教育ボランティアニュースレターは年に1~2回発行している。今年度は第27、28号となるニュースレターを2021年10月、2021年1月に発送した。内容は「コラボ教育学生アンケート結果」「オンライン看護相談の案内」等であった。

5. 専門職講座

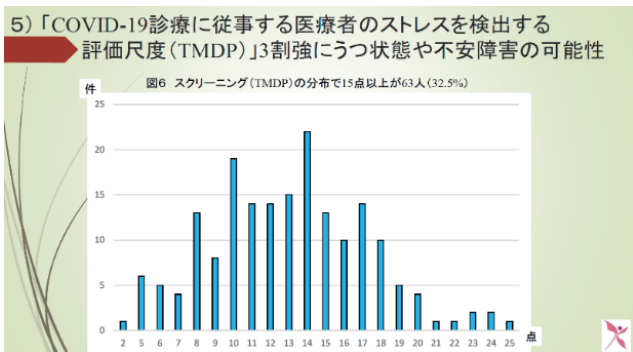
在宅におけるコロナ陽性者への訪問看護の対応オンデマンド研修

いちかんダイバーシティ看護開発センター 苫田ひとみ

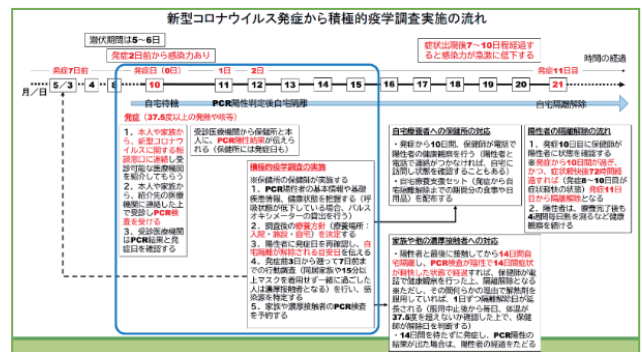
2021年度の専門職講座は、いちかんダイバーシティ看護開発センター地域連携グループと兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会が共催し、『在宅におけるコロナ陽性者への訪問看護の対応オンデマンド研修』を、2021年6月から2022年3月まで連絡協議会ホームページ上で提供した。

2020年度に実施した『2020年度新型コロナウイルス感染症流行第3波時の訪問看護ステーション調査(神戸市看護大学・一般社団法人兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会)』の結果から、兵庫県下の訪問看護ステーションにおける、コロナ感染症への対応状況や対策が明らかになった。このことから、濃厚接触者を含むコロナ陽性者へ訪問看護を提供している訪問看護師の感染リスクの高まりに対して、早急に感染予防対策の教育が必要と考えた。そこで、コロナに罹患した利用者への訪問看護が提供できる体制づくりの一環として、研修内容を考案した。研修は、【研修1】2020年度新型コロナウイルス感染症流行第3波時の訪問看護ステーション調査報告、【研修2】新型コロナウイルス感染者に対する保健所の管理・訪問看護との連携、【研修3】新型コロナウイルス感染者への訪問看護の特徴ー訪問看護の利用者がコロナ陽性になったときー、【研修4】訪問看護における感染リスクと訪問の実際、【研修5】新型コロナウイルスに感染した利用者への訪問看護デモンストレーションとした。開催方法は、何度でも繰り返し視聴できる動画配信が適切と考えオンデマンド研修とし、長期間公開するようにした。

閲覧回数は100~200件認め、視聴後アンケートでは「俯瞰して見られる大学からの継続的な調査報告の情報発信が助けになる」「保健所や保健師の役割が分かり、連携が大切であると感じた」「研修内容が具体的で現場に即しており、在宅のゾーニング例や滞在時間、具体的な観察、指導のポイントを知ることができた」「訪問時の基本姿勢を守る事が自分自身を守ることに繋がるため、多職種で共有、実施、評価、修正していくために参考にした」等の声が聴かれた。視聴者にとって、高い満足度評価が得られた研修となった。



「新型コロナウイルス感染者に対する流行第3波時の訪問看護ステーション調査報告」より



「2020年度新型コロナウイルス感染症保健所の管理・訪問看護との連携」

Ⅱ 健康支援グループ

ICT を用いた看護の開発と展開

いちかんダイバーシティ看護開発センター 水川真理子
公衆衛生看護学分野 岩本 里織

1. グループの概要

いちかんダイバーシティ看護開発センターの健康支援グループは、神戸市から委託を受けた事業の「オンライン看護相談(健康相談)」事業と、「オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防」事業を担っている。

コロナ禍において、地域住民は、受診や健康診断、訪問・通所サービスなどを控える傾向があり、慢性疾患の重症化や、介護負担の増加、子育て期の母親のストレスの増加などさまざまな健康課題を抱えていることが想定された。コロナ禍で生じる様々な問題の解消のために、オンライン診療が解禁となったほか、オンラインでの交流の機会も激増した。本学は、コロナ禍における地域貢献活動として、2020年度に、オンライン保育やオンラインもの忘れ看護相談などを開催し、ICTを用いた看護の展開をいち早く取り入れてきた。これらの経験も踏まえて、2021年度からは、神戸市の委託事業の一環として、ICTを用いた看護を開発、展開することとなった。

2. オンライン看護相談

リーダー：岩本里織

メンバー：グレッグ美鈴、林千冬、坪井桂子、嶋澤恭子、小山富美子、畑中あかね、山下正、関口瑛里、水川真理子、磯濱亜矢子、苫田ひとみ、宮島朝子

オンライン看護相談事業では、オンライン掲示板による相談システムを開発・運用し、市民への相談に応えるとともに、神戸市民の健康相談へのニーズを把握し、看護相談システムの評価を行うことを目的としている。健康支援グループのオンライン看護相談班の看護教員が、健康に関する悩みや不安などの相談に応じることで、疾病予防や、子育てや介護の負担感の軽減につながることを期待している。

(1) オンライン看護相談の開設経過

2021年4月から7月：オンライン看護相談の実施方法の検討、システム構築の検討、マニュアルの作成等

2021年7月：システム構築業者との打ち合わせ(2社)

2021年8月から12月：システム構築とシステムの確認(数回の確認作業あり)

2021年12月13日：オンライン看護相談の市民公開



「オンライン掲示板」を用いて、
あなたの健康に関する相談に看護大学の看護専門職がお応えします。
ご相談は、次の「ご相談前にお読みください」の内容を確認後に、
下の「相談フォーム(相談の入り口)」からお入りください。

ご相談前にお読みください

- 相談は、匿名で無料です。
- 看護職(保健師、助産師、看護師)が相談を受けております。「診療」ではありません。
- 相談への回答は、相談者にとって最善と思われる内容をお答えしますが、文字情報から読み取れる範囲での回答になりますので、回答できる内容には限りがあります。ご了承ください。

相談内容について

ご相談いただける内容は「健康」に関する内容です。生命の危険がある場合や早急に対応が必要な相談など(目の前の暴力やけが、犯罪、自殺企図など)、緊急を要するご相談は受け付けておりません。
これらについては、下記のページをご覧ください。

[緊急を要する相談への対応窓口 >](#)

相談の受付と回答について

- 受付
平日24時間
※土日祝日、年末年始は受け付けておりません。
※「平日の金曜日」と「祝日の前日」は16時まで。
- 回答
回答は、相談受付から24時間以内を予定しております。
※内容によっては回答までお時間を要する場合があります。

上記の内容をご理解の上、下記の「相談フォーム(相談の入り口)」のボタンをクリックして、ご相談ください。
ご相談に関するご質問例も掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

[相談に関するご質問例 >](#)

下記の「相談フォーム(相談の入り口)」をクリックして、ご相談ください。

[相談フォーム\(相談の入り口\) >](#)

II 健康支援グループ

(2) オンライン看護相談実績

オンライン看護相談の相談実績を表1、相談内容を表2に示す。相談内容は、「病気や受診などに関する相談」6人（46.25）と最も多く、次いで「健康づくりや健に関する相談」3人（23.1%）、「心の悩みに関する相談」「新型コロナウイルス感染症に関する相談」2人（15.4%）であった。実際の相談内容をみると、分類に関係なく、多様な相談がみられた。健診等の結果の見方やその対応の相談、心の悩み、物忘れ、などの相談がみられた。新型コロナウイルス感染症関連は、ワクチン接種に関する相談であった。

表1 令和3年度オンライン看護相談（健康相談）相談実績

相談受付日 (土・日・祝以外)	新規		終了		継続中	
	人数	件数	人数	件数	人数	件数
12/13~17	1	1	0	0	1	1
12/20~24	2	3	0	0	3	4
12/27~28						
1/4~7	0	0	1	1	2	3
1/11~14	0	0	0	0	2	3
1/17~21	1	1	1	1	2	3
1/24~28	3	3	2	3	3	3
1/31~2/4	2	2	1	1	4	4
2/7~10	1	1	1	1	4	4
2/14~18	0	0	0	0	4	4
2/21・22・24・25	1	1	0	0	5	5
2/28~3/4	0	0	1	1	4	4
3/7~11	0	0	0	0	4	4
3/14~18	0	0	0	0	4	4
3/22~25	0	1	0	0	4	5
3/28~31	1	1	1	1	4	5
合計	12	14	8	9		

表2 相談内容

相談内容	人	%
病気や受診などに関する相談	6	42.9
健康づくりや健康に関する相談	4	28.6
心の悩みに関する相談	2	14.3
新型コロナウイルス感染症に関する相談	2	14.3

表3 相談者の年代

年代	人	%
60-69歳	1	7.1
50-59歳	6	42.9
40-49歳	2	14.3
30-39歳	3	21.4
20-29歳	1	7.1
20歳未満	1	7.1

Ⅱ 健康支援グループ

(3) オンライン看護相談の相談者へのアンケート結果

オンライン看護相談の相談者からのアンケートを表4に示す。7名からの回答があり、相談動機は、「オンラインで気軽に相談できるから」7名(100%)、「匿名で相談できる」と「無料だから」5名(71.4%)、「看護大学が実施しているから信頼できる」4名(57.1%)であった。

オンライン看護相談による課題解決や示唆が得られた者は、できや・まあできた7名(100%)、オンライン看護相談の回答者の対応は、よい・まあよい7名(100%)などであり、利用者の評価は非常に高かった。

表4 オンライン看護相談の相談者へのアンケート結果

	人	%
性別		
男性	4	57.1
女性	3	42.9
年代		
50-59歳	3	42.9
40-49歳	2	28.6
30-39歳	2	28.6
オンライン看護相談を、どこで知ったか		
1,インターネットの検索	3	42.9
2,広報	2	28.6
3,チラシ		0.0
4,人から聞いた	1	14.3
5,その他*	1	14.3
オンライン看護相談に相談した動機(複数回答)		
1 看護大学が実施しているから信頼できる	4	57.1
2 オンラインで気軽に相談できるから	7	100.0
3 匿名で相談ができるから	5	71.4
4 他に相談できるところがなかったから	0	0.0
5 無料だから	5	71.4
6,その他	0	0.0
オンライン看護相談により課題解決や示唆の獲得		
1,できた	4	57.1
2,まあできた	2	28.6
3,どちらでもない		0.0
4,あまりできなかった		0.0
5,できなかった		0.0
オンライン看護相談の回答者の対応		
1,よい	6	85.7
2,ややよい	1	14.3
3,どちらでもない		0.0
4,やや悪い		0.0
5,悪い		0.0
オンライン看護相談を再度利用する可能性		
1,ある	6	85.7
2,少しある	1	14.3
3,どちらでもない		0.0
4,あまりない		0.0
5,ない		0.0
オンライン看護相談を友人・同僚に勧める可能性		
1,ある	6	85.7
2,少しある	1	14.3
3,どちらでもない		0.0
4,あまりない		0.0
5,ない		0.0
オンライン看護相談の満足度(10段階)		
1-10段階		
10	4	57.1
9	1	14.3
8	1	14.3
7	1	14.3

II 健康支援グループ

(4) まとめと今後の展望

オンライン看護相談の利用者は、高い満足感を持って相談を終了している。複数回の相談をされる方もおり、一度相談をされる方は、回答に満足され、その後の相談にもつながっていることが考えられる。

相談者は、オンラインで気軽に無料、名前や顔を出さずに匿名で相談できる手軽さ、気軽さがあることを感じているようである。このことは、オンライン相談方法の優れている点である。相談内容も、相談者の状況やココロの内を詳細に記載される方もおられたり、ちょっとした気軽な相談であったり、匿名であるからこそその相談の特徴が表れている。いずれも、相談員が丁寧な対応をし、回答内容について、相談者の相談の課題が解決していると高い評価が得られている。相談員への回答は、医療機関受診を勧めるものも多い。このことは、相談者が相談することで、単なる不安の解決だけではなく、早期の医療機関受診にもつながっており、疾病の早期発見・予防にもなっていると考える。

このようなオンライン看護相談を多くの方に活用していただきたいものの、現状の相談数が少ないことが課題である。今後、多様な機関に周知していくことが必要である。

「オンライン看護相談」ご利用の手順

1. 「オンライン看護相談」のURLもしくは、QRコードを読み取ってください。こちらのページが表示されます。

2. 「相談フォーム(相談の入り口)」をクリックします。

3. 看護の相談窓口
ログインID
パスワード
ログイン
新規にご利用の方(登録)
お問合せ(0)P.05もお忘れの場合
アドバイザー
「新規にご利用の方(登録)」をクリックします。

4. 新規ご利用登録
ログインID※
パスワード※
パスワード(確認)※
ニックネーム※
年齢※
性別※
お住まいの地区
所属区
キャンセル 確認する
項目すべてを入力し、「確認する」をクリックします。

5. 新規に相談をする
相談内容をご記入ください。
相談区分 健康づくりや健康に関する相談 新型コロナウイルス感染症に関する相談 肺炎や発熱などに係る相談
相談内容(500文字以内)
相談を入力して下さい。
キャンセル 確認する
① 相談区分を選びます。
② 相談内容を入力します。
③ 「確認する」をクリックします。

6. 掲示板といっても、非公開ですので、書き込まれた内容は、他の方には見えません。安心してご相談ください。
相談内容(例)
Q. コロナワクチンの安全性について
Q. 健康診断結果への不安がある
Q. 認知症の検査について知りたい など

図1. オンライン看護相談ちらし

II 健康支援グループ

2. オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防

リーダー：水川真理子

メンバー：谷知子、片倉直子、石橋信江、畑中あかね、磯濱亜矢子、
 苫田ひとみ、宮島朝子

健康支援グループのオンライン慢性疾患重症化予防班の医師、看護教員は、医療機関と連携し、コロナ禍で通院を控える傾向のある心不全患者など重症化リスクの高い慢性疾患患者を対象として、看護師がオンラインで患者の血圧・脈拍などの健康状態を把握し、異常の早期発見、必要時に健康指導などを行うことで、重症化予防につながるプログラムを開発している。この取り組みによって、慢性疾患患者の重症化予防に向けた「オンライン看護」のモデルが構築されることを目指している。2021年度は、システムの開発を行った。2022年度は、本事業に参加を希望する神戸市内の医療機関と、その医療機関に通院中の心不全や糖尿病患者を募集して、プログラムを展開し、その効果を評価する予定である。

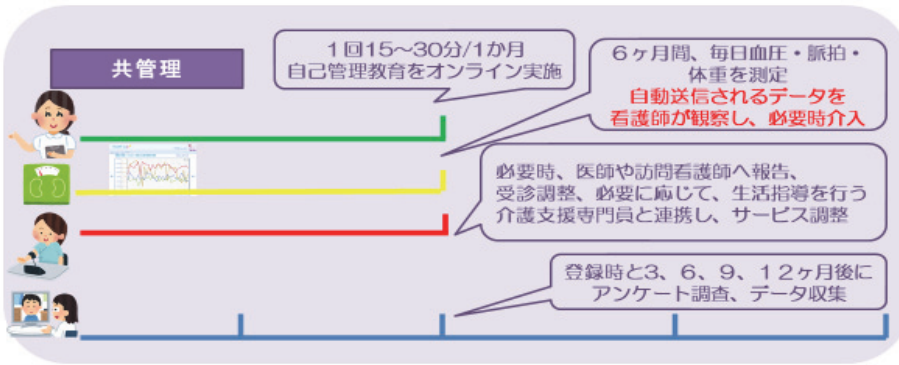


図2. オンラインナーシングによる慢性疾患重症化予防プログラム

The pamphlet is divided into two main sections:

慢性心不全とは？ (What is chronic heart failure?)

心臓は、一時も休むことなく取除と拡張を繰り返し、全身の血液を循環させるポンプの働きをしています。心臓のポンプの働きが悪くなり、全身へ送り出す血液量が減少し、からだの各臓器に必要な酸素を送り込めなくなった状態を「慢性心不全」といいます。

1 心臓のポンプの働きができなくなると？

- 心臓に血液がたまる(=ラッ血) → ※胸のレントゲン検査をすると、心臓が大きくなります。(心臓拡大) (=心臓比50%以上)
- からだから心臓へ送り込まれるはずの血液が少なくなり、肝臓などの臓器がもくもくたり(=肝臓大など)、手足の浮腫が起こる。 → からだの臓器の機能が悪くなる。
- 肺から心臓へ送り込まれるはずの血液が滞り、肺に血液がたまる。(=肺うっ血) → 呼吸困難になり、放っておくと死に至る。

心不全の心臓

- 心臓自体に酸素や栄養を送っている血管が詰まり、心臓の内部が死んでしまう。
- 心臓の筋肉が分厚くなったり、心室(内腔)が拡大したりして、心臓が大きくなる。心臓は収縮したり、拡張したりできなくなり、十分な量の血液を送り出せなくなり、送り出したりできなくなる。

むくみを調べる (How to check for swelling)

● からだのむくみとからだのたるさ

からだに余分な水がたまってくると、からだがむくみます。主に、まぶたを中心とした顔と足です。そして、からだが重く、たるくなります。治療していても受診せずに、調べてもらいましょう。

● むくみの調べ方

毎朝、同じ時間に体重測定をしましょう

こんな時は要注意！ → 体重が急に増える。(1日に1kg増など)

むくみ(浮腫)があるかどうかを自分で調べてみましょう

こんな時は要注意！

- 足の甲やくるぶしのところを指で押して、放したときに指のあとが残る。
- すねを指で押さえて、離したときにあとが残る。
- 靴下を脱いだときに、くっつきとあとが残る。
- 毎朝起きたときに両まぶたが腫れまわったり、日中も続く。

図3. 患者教育パンフレット

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

1. グループ概要

訪問看護ステーションなどの地域医療介護を支える事業者は、総合的な知識や技能が求められる一方、小規模が多く、継続的・体系的な人材育成や連携システムが十分ではない状況が推測される。コロナ禍においては、地域の医療介護専門職の間でもオンライン（ICT）研修の活用が進んできており、研修への参加経験はあっても、研修を提供する経験のある事業者や多職種連携、利用者や家族への対応はまだ少ない現状が見受けられる。

そこで、在宅ケア支援グループでは **with-after** コロナ社会を見据え、ICT を活用した①専門職・事業者への人材育成支援、②円滑な多職種連携モデル、③利用者や家族への支援モデルの開発を目指して活動を行っている。

2. グループメンバー

片倉 直子 片山 修 船越 明子 小山 富美子 丸尾 智実 宇多 みどり 水川 真理子
大瓦 直子 苫田ひとみ

3. 研修事業

(1) 精神科訪問看護における GAF 尺度を用いた精神症状と社会機能のアセスメント

精神看護学分野 船越 明子

いちかんダイバーシティ看護開発センター 苫田ひとみ

1) 背景

近年、精神科訪問看護基本療養費を算定した訪問（以下、精神科訪問看護）を実施する訪問看護ステーションは増加している。

精神科訪問看護では、2020年4月の診療報酬改定において GAF (Global Assessment of Functioning) 尺度による評価を訪問看護記録書、報告書、および療養費明細書に記載することが必須となった。GAF 尺度は、精神症状の重症度と心理・社会的・職業的機能を1～100点で評価する全体的評価尺度である。訪問看護師には、精神症状を適切にアセスメントする能力が求められている。

2) 事業内容・経過

精神疾患をもつ訪問看護利用者の症状と機能のアセスメントに必要な実践的な知識を身につけ、GAF 尺度を用いて適切に評価できる技術を習得することを目的としたオンライン研修を実施した。研修の到達目標は、以下の2点である。

- ・精神疾患をもつ訪問看護利用者の症状と機能のアセスメントのポイントを理解することができる。
- ・GAF 尺度を用いて適切に評価することができる。

研修では、GAF 尺度の評価に必要な基礎的知識についての講義と臨床事例を用いた演習を行った。日時と講師は以下の通りである。

日時：2021年11月13日（土）14時00分～16時00分

講師：小瀬古 伸幸（訪問看護ステーションみのり総括所長）

方法：ZOOMによるリアルタイムのオンライン研修

3) 業務成果・実績

① 研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

本研修は、兵庫県下の訪問看護ステーションを対象に参加の募集をした。

事前参加申込数は77名であり、募集人数50名を超えたため、講師と研修方法を検討して実施した。事前参加申込者の所属ブロックは、「神戸」が最も多く51%、次いで「阪神南」が22%であった（図1）。当日の参加人数は61名であり、研修後に実施したアンケートへの回答数は45名、回収率は74%であった。回答者の所属ブロックは、「神戸」43%と「阪神南」31%が多く（図2）、職種は「看護師」が98%、「訪問看護ステーションでの勤務経験年数は10年以上」が47%と多かった。また、職場での立場は「スタッフ」が63%、次いで「管理者」が34%であった。

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

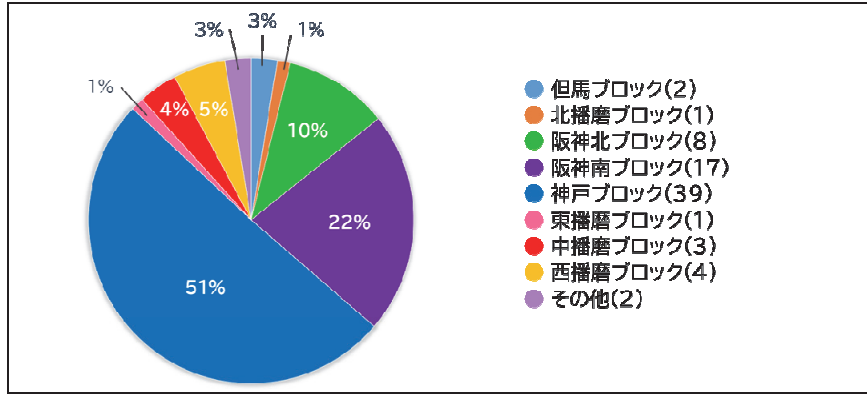


図 1. 事前参加申込者の所属ブロック

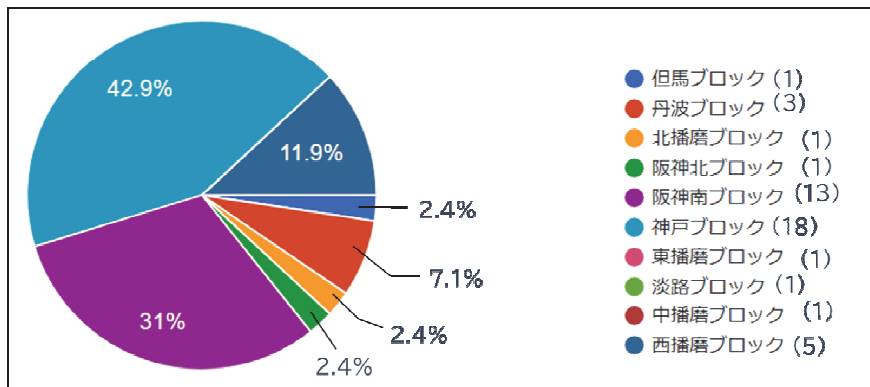


図 2. 回答者の所属ブロック

② 参加理由・参加後の意見や感想

参加理由は、「GAF 尺度の点数のつけ方を知りたかった」82%、「GAF 尺度に興味があった」57%、「無料だったから」36%であった（図 3）。参加して良かった点に関する自由記載では、「診療報酬改定に直結する内容だった」「無料だった」「内容が具体的で実践的だった（演習があった）」「チャットでタイムリーに相談や意見交換ができた」「他の参加者の意見を聞くことができた」「所属施設のスタッフ全員が受講でき共有できる内容だった」「パソコン、スマートフォン、iPad のどの端末からも参加できた」「リモート（ZOOM）研修だった」ことが挙げられた。研修内容の満足度では、すべての回答者が「大変参考になる」または「参考になる」と回答した。また、個別の意見・感想では「内容が具体的で分かりやすく、今までの疑問点を解消することができた」「チャットでタイムリーにいろいろな意見がみられて良かった」「今まで手探りやステーション独断の評価だった。評価の視点や方法が分かった」等の声が聴かれた。

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

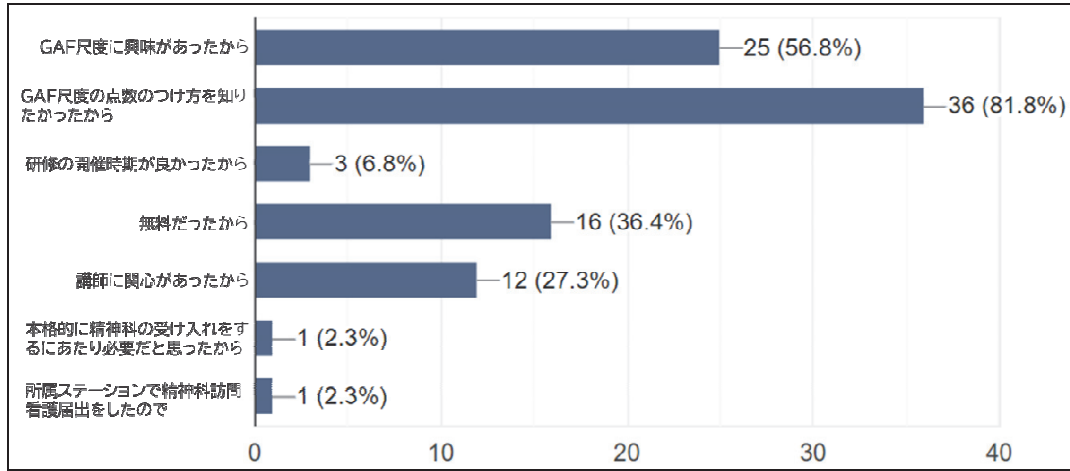


図 3. 参加理由（複数回答）

③ ICT 利用状況

用いた端末は「パソコン」55%、「タブレット」30%、「スマートフォン」16%であった。

④ 今後の要望

「精神科訪問看護における困難事例の相談」が最も多く 60%、次いで「精神科訪問看護における事例検討会」48%、「在宅ケアに関するネットワークづくりの支援」40%、「貴ステーションや地域の勉強会講師の紹介」35%であった（図 4）。

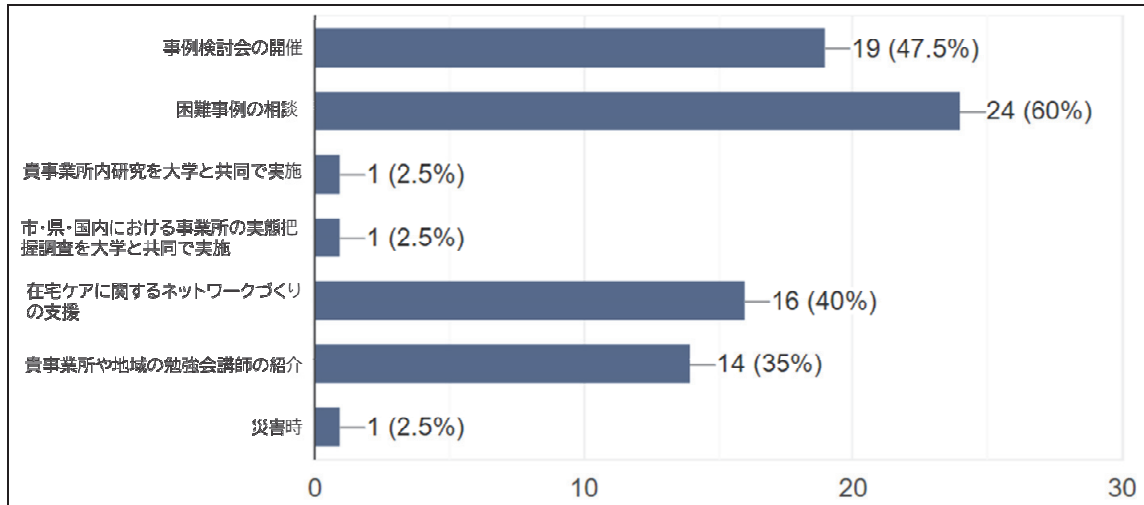


図 4. 精神科訪問看護において本学に求めること（複数回答）

4) 来年度の展望

精神科訪問看護に関する研修のニーズが高いことが明らかとなった。来年度は、精神症状アセスメントについて、MSE（Mental State Examination）等の枠組みを用いて学ぶなど、実践的な研修の実施が必要と考えた。また、実際の事例についてのコンサルテーションや事例検討の機会提供について将来的には検討する必要がある。

(2) 訪問看護における「臨床判断能力」を育むためのシミュレーション教育
＜基礎編＞－「臨床判断モデル」の基礎知識と活用方法－

在宅看護学分野 宇多みどり

いちかんダイバーシティ看護開発センター 苫田ひとみ

1) 背景

急速な高齢化をたどる現代、在宅医療体制の充実が急務とされており、中でも訪問看護師の量的・質的確保は喫緊の課題である。昨今、臨床経験のない新卒看護師を訪問看護の場で教育・育成する研修やしくみが開発され、神戸市内においても新卒採用を行っているステーションが散見されつつある。

厚生労働省の調査では、訪問看護ステーションは全国に12393事業所あり、ここ10年で2倍に増えており神戸市においても2.2倍の211事業所となっている(2020年介護サービス施設・事業所調査)。しかし、1ステーションあたりの常勤換算従事者数は、5人前後のまま横ばい状況にあり、看護職以外の理学療法士等の職員が4倍以上に増えてきているのが現状である。このようにステーション従事者が少なく集合研修の機会が少ない訪問看護ステーションにおいて、訪問看護師の継続教育、加えて臨床経験の浅い訪問看護師への継続教育への環境整備が重要となる。

在宅看護実践力に関する調査では、新卒訪問看護師は「症状の変化について迅速に報告できる能力」を身に付けていることを望ましいと管理者は回答していた。取り敢えず連絡できれば、先輩や同僚スタッフに繋ぐことができるという管理者の思いであるが、「気づける」ことが前提課題でもある(宇多ら, 2019)。

そこで、新卒看護師や訪問看護実践が初めての新採用者に対して、また指導的な立場にある訪問看護師に対して、訪問看護における「臨床判断能力」を育むためのシミュレーション教育の研修を企画した。

2) 事業内容・経過

今回は、「臨床判断モデル」の基礎知識と活用方法を理解することを目的として、オンラインによる研修を実施した。具体的には、臨床判断モデルの5つの要素とその関係性が説明できること、能動的な学習方法のヒントを得ること、初心者とエキスパートの違いを理解し、各役割を認識すること、そして、明日から臨地で早速臨床判断モデルを活用してみようという気持ちになることを到達目標とした。

研修内容は、臨床判断モデル(Tanner, 2006)の背景、5つの構成要素(図)とその特徴・関係性の講義に加え、教育実践例の紹介を受けた。その後、参加者交流会を行い、「リフレクションのヒントが得られた」や「経験の浅い職員との思考過程の違いが理解できた」等の意見があり、講師から「先輩を育てるために、先輩たちは惜しみなく、その元になる気づきや解釈、反応のなかみを教えてほしい」と思考発話についての助言があった。日時と講師は、以下の通りである。

日時：2022年1月22日(土)14時00分～16時00分

講師：奥 裕美(聖路加国際大学大学院 看護学研究科 看護管理学 教授)

方法：ZOOMによるリアルタイムのオンライン研修・参加者交流会

3) 業務成果・実績

① 研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

研修は、次年度以降、対面によるシミュレーション研修を予定していたことから、本学へのアクセスがしやすい神戸市内の訪問看護ステーションを中心に案内した。

事前参加申込人数 82 名のうち、当日の参加人数は 60 名であった。研修後に実施したアンケートへの回答数は 43 名、回収率は 72%であった。回答者の「訪問看護ステーションでの勤務経験年数は 10 年以上」が 29%、「3 年未満」が 24%、「1 年未満」が 21%であった。また、職場での立場は「管理者」が 34%で最も多く、「新たに採用されたスタッフを指導・教育する立場」が 22%であった（図 5）。

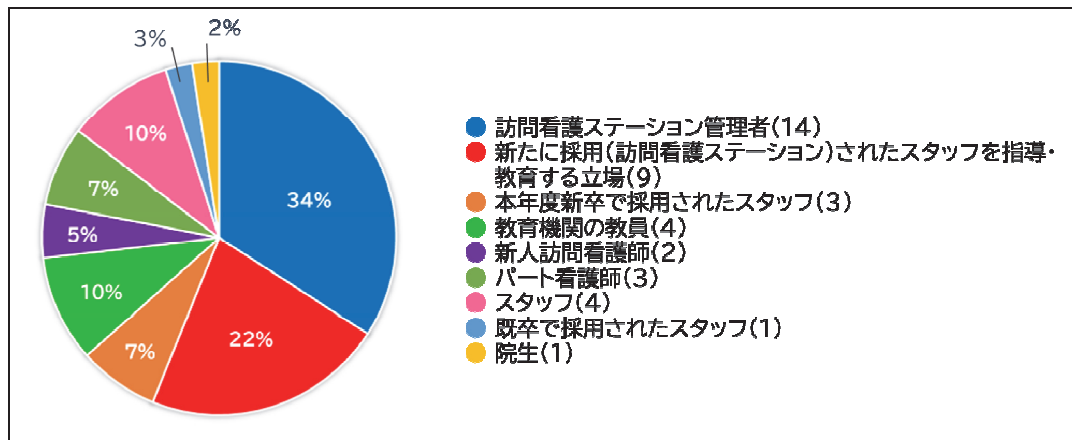


図 5. 現在の職場での立場（未回答 2 名を除く 41 名）

② 参加理由・参加後の意見や感想

研修開催を知った理由は、「送付チラシ」54%、「案内メール」22%、「管理者からの勧め」12%であった（図 6）。参加理由は「テーマに興味があった」70%、「オンライン開催だったから」37%、「無料だったから」21%であった（図 7）。参加して良かった点に関する自由記載では、「グループワークがあった」「内容が実践的であった」「新人教育に活かせる内容だった」「所属施設のスタッフと共有できる内容だった」ことが挙げられた。研修内容の満足度では、すべての回答者が「大変満足できた」または「満足できた」と回答した。また、個別の意見・感想では、訪問看護の経験が浅い参加者から、「枠組みを使用して自身の看護過程を振り返り、先輩への報告に活かしたいと思った」、そして、経験の浅いスタッフを教育する立場にある参加者からは、「経験の浅い職員を指導するにあたり、経験値が少ないことが理由ではなく、思考しやすい導入の仕方を配慮し指導に関わりたいと思う」等の声が聴かれた。

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

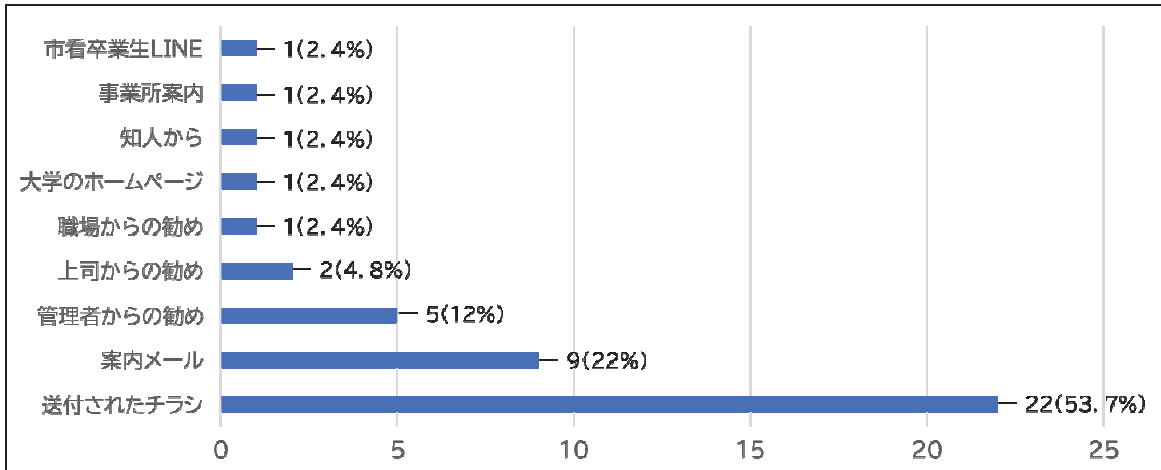


図 6. 研修開催を知った理由（複数回答）

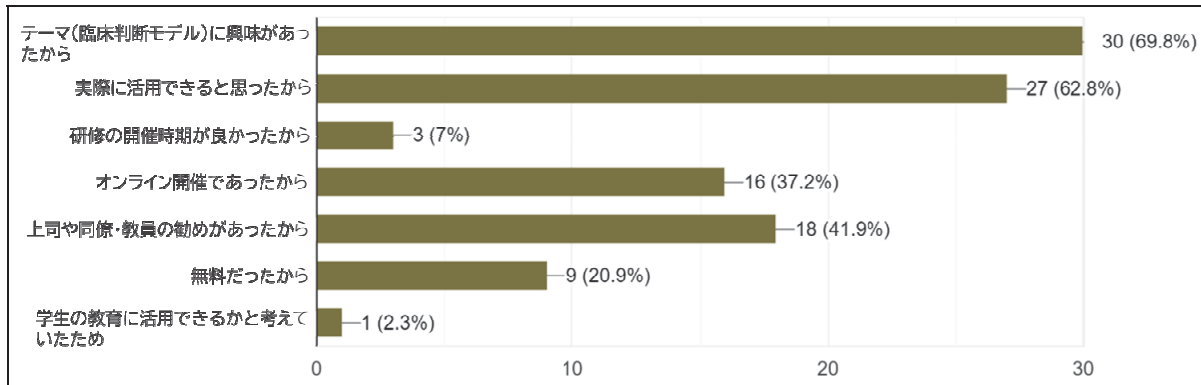


図 7. 参加理由（複数回答）

③ ICT 利用状況

研修参加にあたり、参加者の 79%が「ZOOM_URL を所属内で共有」していた。共有人数は「5 名以上」が最も多く 56%であった。用いた端末は「パソコン」54%、「タブレット」35%、「スマートフォン」12%であった。

④ 今後の要望

今後の大学への要望について、同研修（大学での対面方式）の開催があれば参加したいかの質問に対して、85%が「参加したい」と回答した。

4) 来年度の展望

訪問看護における「臨床判断能力」を育むためのシミュレーション教育に関する研修ニーズが高く、特に対面での実践的な研修が求められていた。今後、在宅での実践場面を募りながら実践方法を共有できる研修（応用編）を検討していくこととする。

(3) 訪問看護ステーションにおける業務継続計画（BCP）作成研修

在宅看護学分野 片倉 直子

いちかんダイバーシティ看護開発センター 苫田ひとみ

1) 背景

2021年度介護報酬は、第一の柱に感染症や災害への対応力強化を掲げている。介護サービス事業者のBCP策定率はかなり低く、内閣府（2020年）の「令和元年度企業の事業継続及び防災の取組に関する実態調査」によると、医療・福祉関係のBCP策定率は22.2%と、企業等他の事業を含む全体の41.8%と比べてかなり低くなっている。このため、介護報酬改定では非常時への対応力強化として、以下の事項が決定されている。

- ・感染症対策の強化
- ・業務継続に向けた取組みの強化
- ・災害への地域と連携した対応の強化
- ・通所介護等の事業所規模別の報酬等に関する対応

2) 事業内容・経過

業務継続に向けた取組みの強化では3年間の経過措置期間が設けられ、すべての介護サービス事業者は、BCPの策定、研修・訓練の実施を義務付けている。そこで、今年度から数年かけて、訪問看護ステーションがBCPを作成するための研修を計画し、今年度は地域やステーションにおける平時のリソースと災害等によるリソース不足、BCPの位置づけや必要性などの総論について学ぶ研修を企画した。また、本研修は兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会との共催で実施した。

日時と講師は下記のとおりである。

日時：2022年2月19日（土）13時～17時

講師：石田千絵（日本赤十字看護大学看護学部地域看護学教授）

金坂宇将（ケアプロ株式会社在宅医療事業部事業部長、ケアプロ訪問看護ステーション東京管理者）

岡田理沙（ケアプロ株式会社在宅医療事業部クオリティマネジメント部門）

研修方法：ZOOMによるオンラインライブ研修。ブレイクアウトルーム等を使用し、研修参加者が発表する等の技術を用いた。

研修内容：

研修前に、オンデマンドビデオ視聴などの課題があった。また、ブレイクアウトルームや発表の仕方などをまとめた操作手引きを、研修事前に研修参加者へ送付し、研修15分前に手引の説明を行った。

当日研修概要：

※自己紹介、挨拶+オンデマンドのまとめ（石田教授）

※ワークの流れとBCP全体との関係等の説明（石田教授）

個人ワークとグループワークを4セット（5グループに分かれ実施）

ワーク1：重要業務の選定

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

- ワーク 2：重要業務に必要なリソースの抽出
- ワーク 3：重要業務とリソースリスクの時系列整理
- ワーク 4：リソースリスクへの時系列での対策作成
- 各ワーク後に 1～2 グループのワーク内容の発表

※まとめ

※ 本日のワークと BCP ひな形との関係

※ 事業継続マネジメントについて

※ 地域連携について

3) 業務成果・実績

① 研修参加者の状況および研修後アンケート回答者

事前参加申込数 60 施設 107 名であり、申込施設の所属ブロックは、「神戸」が最も多く 23%、次いで「阪神南」が 22%であった（図 8 左）。当日の参加人数は 42 施設 67 名であった。募集数を越えての参加希望があり、数施設の参加を断る事態が生じた。しかし、兵庫県内で多くのコロナ感染者を認めた時期の開催となり、「急な訪問依頼が入った」「スタッフが濃厚接触者になり、急遽勤務を代わることになった」等の理由により、複数ステーションから参加取り消しの連絡を受けた。

研修後に実施したアンケートへの回答数は 52 名、回収率は 78%であった。回答者の所属ブロックは、「阪神南」が 29%と最も多く、次いで「神戸」が 23%、「東播磨」が 17%であった（図 9）。参加者の「訪問看護ステーションでの勤務経験年数は 10 年以上」が 40%、「5～10 年未満」が 27%、「5 年未満」が 17%であった。また、職場での立場は、「管理者」が 69%と最も多く、「スタッフ」が 21%であった（図 10）。

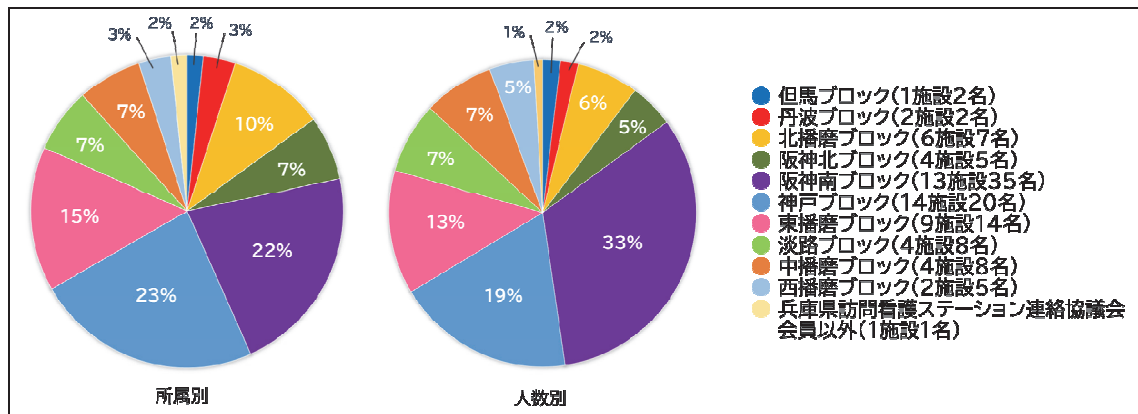


図 8. 事前参加申込者の所属ブロック

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

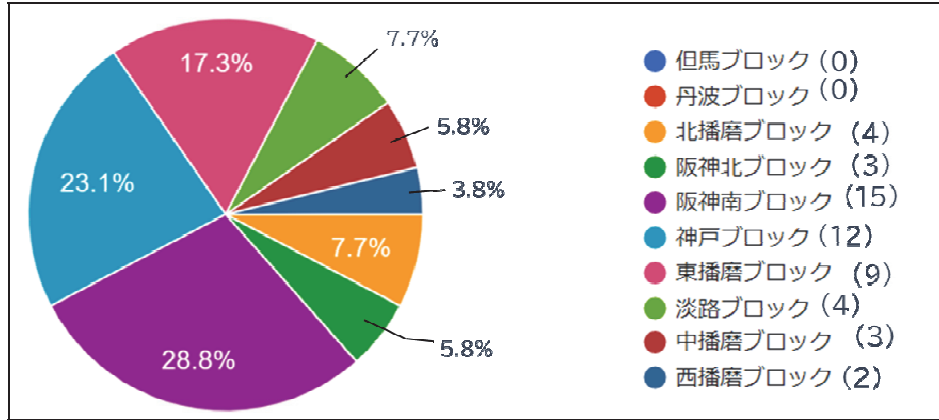


図 9. 回答者の所属ブロック

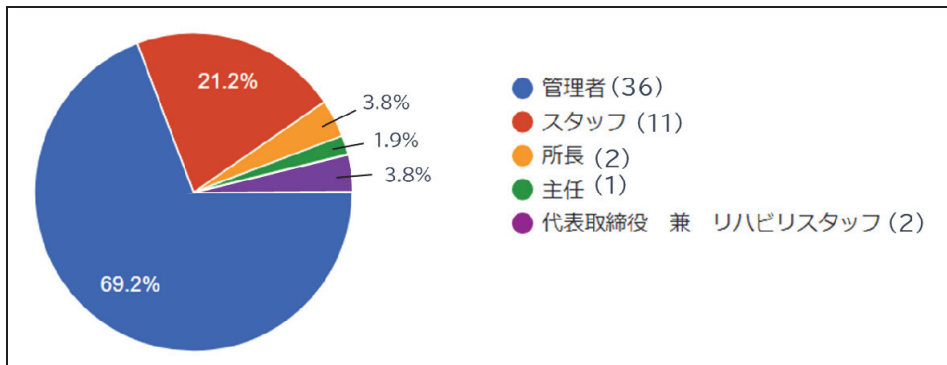


図 10. 現在の職場での立場

② 参加理由・参加後の意見や感想

研修開催を知った理由は、「案内メール」52%、「送付チラシ」40%、「上司からの勧め」6%であった（図 11）。また、参加理由は、「実際に活用できる」83%、「テーマに興味があった」77%、「オンライン開催だったから」44%、「無料だったから」33%であった（図 12）。

参加して良かった点に関する自由記載では、「介護報酬改定で BCP 作成が必要になり、報酬に直結する内容だった」「ワークで実際に作成し具体的に学べた」「グループワークにファシリテーターがいた」「他の参加者の意見を聞くことができた」「他のスタッフと共有して取り組める内容だった」「（配布された BCP 作成過程）シートを活用できる」「ZOOM の操作方法が事前に提示されていた」ことが挙げられた。そして、研修内容の満足度では、すべての回答者が「大変満足できた」または「満足できた」と回答した。加えて、個別の意見・感想では「作成方法が分からなかったが、いい時期に参加でき不安が解消された」「災害時のハザードマップを事前に準備することができ、何に取り組むべきかを考えるきっかけとなった」「平常業務を考え災害時につなげ、リソースを把握しリスク対策をするなど、より具体的な BCP 策定を他のスタッフと共有し全員で取り組んでいきたい」等の声が聴かれた。

Ⅲ 在宅ケア支援グループ

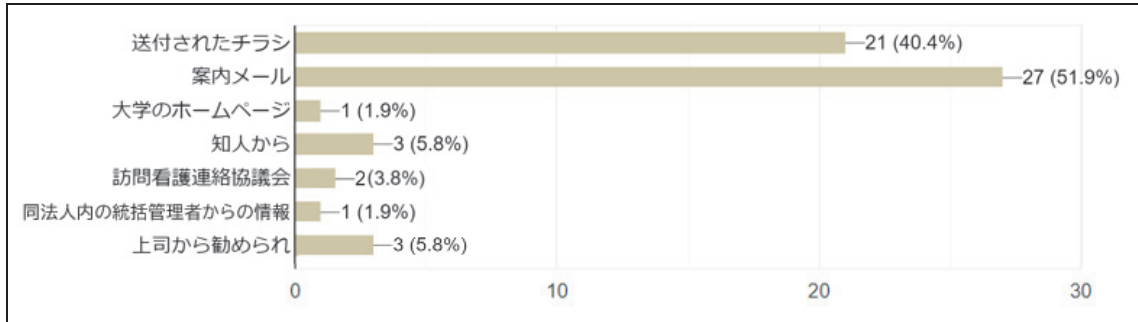


図 11. 研修開催を知った理由（複数回答）

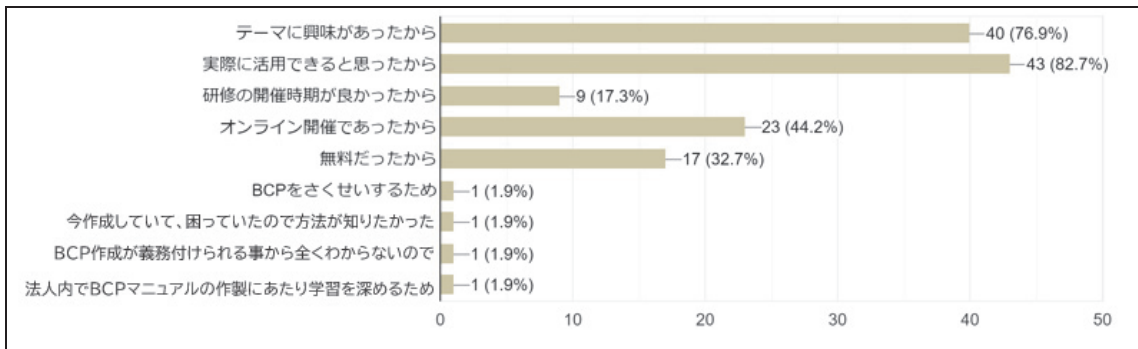


図 12. 参加理由（複数回答）

③ ICT 利用状況

研修参加にあたり、参加者の48%が「ZOOM_URLを所属内で共有」しており、共有人数は「2名」が最も多く68%、次いで「5名以上」が24%であった。また、用いた端末は「パソコン」83%、「タブレット」15%、「スマートフォン」2%であった。

ZOOM使用の困難感は、「あまり困らなかった」43.1%、「困らなかった」39.2%、「困った」17.6%であった。「あまり困らなかった」または「困らなかった」理由として、「普段からZOOMを活用している」の他に、「事前にZOOM使用法をもらっていたため、すぐに使用出来た」「事前の資料説明で、使い方等の内容を理解することができた」等の意見が複数あった。また、「困った」理由では「PCに不慣れなため入室に時間がかかった」「普段は受け身のZOOMが多いため不安が多かった」「自施設の通信問題」等が挙げられた。

④ 今後の要望

今後の大学への要望では、「BCP作成研修のフォローアップ研修」を希望する意見が多数あった。

⑤ 研修後の講師からの意見

研修の参加者は、阪神淡路大震災を経験している者が多く、シミュレーション力が高い。一方で、平时に使用しているリソースが、「災害」時にどのように不足するかの危険性に結び付けて考えるのに馴染みにくい参加者もいた。リソース不足＝災害という考え方に一度切り替えると、総合的な災害対策が向上すると考えられる。

4) 来年度の展望

- ① BCPの完成には、この度の研修を持ち帰って作成する必要がある。講師からも、阪神淡路大震災を経験しているために、平時に利用しているリソースが不足した場合のBCP策定に馴染みにくいことも考えられる。また、参加者から、作成したBCPに対するフォローアップの必要性が寄せられている。来年度は、作成したBCPの発表や作成過程に関する情報共有、訪問看護ステーションだけでは対応できないリソースに関する課題の洗い出しを行い、担当地域のリソース確保の強化をしていく必要性が考えられる。
- ② オンライン研修におけるグループワーク等、研修参加者がZOOMを操作する参加に不安を覚えるコメントが認められた。しかしながら、参加者は事前に配布した操作手引きと研修前説明で、大きな混乱なく研修を受けていた。事前に使用方法を説明したうえでオンライン研修を行うことで、訪問看護ステーションもICTに慣れていくことが考えられた。

4. 神戸市の COVID-19 第 4 波時の訪問看護ステーション状況と関連要因の調査

在宅看護学分野 片倉直子

(1) 背景

神戸市は、地域保健法第 5 条第 1 項の規定により、保健所を設置できる政令指定都市である。したがって、COVID-19 流行下では、兵庫県と連携しつつ神戸市単位でその対策を講じる必要が生じた。第 4 波では、保健師が健康観察のために訪問しなければならない重症な入院待機中自宅療養患者が多発し、神戸市は市内訪問看護ステーションへメールなどでそのような患者への訪問に関する神戸市高齢自宅療養者等訪問業務等健康管理支援事業（支援事業）を依頼し、最終的に 10 数か所の訪問看護ステーションが手上げをし、ケアを提供した。このような支援事業を通して顕在化した課題のひとつは、訪問看護ステーション管轄は都道府県にあるため、神戸市は市内訪問看護ステーションを掌握する部門がないことである。神戸市は、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会の神戸ブロックにあたるが、神戸市内すべての訪問看護ステーションが参加しているわけではない。また、兵庫県訪問看護ステーション連絡協議会は、大阪府のそれと異なり、行政と連携して委託業務を統括する機能を十分に有していない。医師会や薬剤師会は神戸市単位の法人格を有しているが、市内訪問看護ステーションに関してはそのようなまとまりもない。

このことは、自然災害時の保健活動時にも影響すると考えられ、COVID-19 流行下における神戸市内の訪問看護ステーションの状況、および神戸市との連携の障壁を明らかにすることは、今後、新興感染症や自然災害の際に訪問看護ステーションが神戸市と共に対応するために必要な施策を検討する一助となると思われた。また、市内訪問看護ステーションの新興感染症や自然災害への対応力は、十分な地域包括ケアシステム体制を整えていることが前提である。そこで、先行研究で明らかになっている、地域包括ケアシステムを充足する要因についても調査した。あわせて、国際都市神戸市に居住する外国人も、地域包括ケアシステムによる平和と豊かさを享受できるようにすることを目指し、そのシステムの一部を担う訪問看護の利用状況を把握し、その課題を明らかにした。

上記の問題意識にもとづき、調査は下記の内容を明らかにすることを目的に実施した。

- 1) 神戸市内訪問看護ステーションの経営状態を把握する。
- 2) 神戸市内 COVID-19 第 4 波から感染者数が最大となった第 5 波までの訪問看護ステーションの実態を把握する。
- 3) 神戸市支援事業を引き受けた、また今後も引き受けたいとしている訪問看護ステーションの背景、神戸市が新興感染症や自然災害の際に市内訪問看護ステーションと協働や連携をする際に整えるべき環境を把握する。
- 4) 神戸市内訪問看護ステーションの管理者による、地域包括ケアシステムを充足する条件の達成状況の認識を把握する。
- 5) 神戸市内訪問看護ステーションの管理者による、退院調整や多職種連携をする際に必要な Information and Communication Technology (ICT) 活用環境を把握し、活用しているステーションの特徴を明らかにする。
- 6) 神戸市内外国人への訪問看護の提供状況と課題を把握する。

(2) 事業内容・経過

調査内容は、「COVID-19 禍における神戸市内訪問看護ステーション現状調査報告書」に詳細を示した。

調査方法は、神戸市内訪問看護ステーションへ無記名式質問紙による悉皆調査を実施した。調査期間は2021年7月~2022年3月、質問紙調査期間は、2021年12月14日から2022年1月30日である。

調査対象者は、神戸市内訪問看護ステーション235件である。回収票は80票（回収率34.0%）であった。

(3) 業務成果・実績

神戸市内訪問看護ステーション調査結果から得た概要は下記のとおりである。

- 1) 調査に回答したステーションは県内の平均以上の人数規模が多く占めている可能性がある。
- 2) 看護師人数が多いことは経営状態の改善につながっていると推測できる。
- 3) 神戸市支援事業受託を促進する課題として、平時に訪問看護を提供している利用者やステーション従事者への感染の危険性を避ける為に、限られた看護師が感染者等の訪問を実施していると考えられるが、その人的余裕のなさが、臨時の支援事業に対応できないことにつながっていることが推測できる。
- 4) 支援事業を引き受けることができたステーションの背景は、専門職常勤換算人数、看護職常勤換算人数が多い、看護師常勤人数が5人以上の機能強化型届け出があることから、マンパワーの余裕が推測できた。
- 5) BCP策定が「完成した」ステーションが2割以下であり、また自然災害時のBCPや研修・訓練はCOVID-19のそれと比べると完成や実施が少ない。
- 6) 地域包括ケアシステムにおいて、神戸市内に訪問看護ステーションが増加してきているが、必要な人の利用状況や一般の人の認知度を鑑みると、必ずしも地域包括ケアシステムとして望ましい状況ではない。在宅看取りや緩和ケアの診療所に関して、その不足や在宅看取りや緩和ケアの診療所への集中的負担、また在宅療養支援診療所を掲げていても、外来中は看取りなどの対応ができなかったり、医師により方針が異なるなどの状況が示されている。在宅看取りや在宅緩和ケアを円滑に提供できるようにするために、訪問看護はその経験や能力のあるケアマネジャーを選んでいることが推測できる。多職種連携は円滑に進められているが、COVID-19により対面での連携が難しくなっている。また、退院調整の不十分さにより在宅療養を開始してから様々な問題が生じていることが示されている。
- 7) 41件（51.3%）は外国人の利用者または介護者への訪問看護を提供していた。訪問看護を受けている外国人の出身国は神戸市内の外国人住民数と関連していると考えられる。
- 8) 退院調整や多職種連携をする際に必要なICTを活用しているステーションの特徴として、機能強化型届け出あり、経営状態が黒字、区医療介護サポートセンター研修・会議の参加であった。市内でも須磨区、垂水区、西区の方が、他の地区よりもICTを活用できている回答の割合が多かった。経済的な余裕はICTに関わるツールの購入につ

ながっていると推測できた。また、区医療介護サポートセンターはオンラインを活用した研修・会議を行っているので、参加することでICTの活用機会が増えている可能性がある。

(4) 来年度の展望

本調査結果にもとづき、BCP策定支援、退院調整や多職種連携におけるICT活用促進のとりくみを継続するほか、訪問看護ステーションの人員規模拡大や収支などの経営状態の改善に関する対策の検討も必要である。

5. オンラインを使用した多職種による退院時共同指導モデルの検討

在宅看護学分野 丸尾 智実
慢性病看護学分野 小山富美子

(1) 背景

退院時共同指導は、地域の医療機関等から退院・退所する利用者に、入院していた病院等の医師やスタッフと在宅側の医師や訪問看護師、ケアマネジャー等が共同して指導を行うものであり、退院時カンファレンスとも呼ばれる。診療報酬および介護報酬における退院時共同指導加算は、一定の条件を満たした際に算定できる。2021年度介護報酬改定では、退院時共同指導加算の算定要件について、COVID-19対策やICT活用の観点からオンラインの活用が認められるようになり、ビデオ通話が可能な機器を用いて共同指導した場合でも対面と同等に算定が可能となった。オンラインを使用して退院時共同指導を行う場合は、患者の個人情報を当該ビデオ通話の画面上で共有する際に患者の同意を得ていること、保険医療機関の電子カルテなどを含む医療情報システムと共通のネットワーク上の端末において共同指導を実施する場合には、厚生労働省の「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン」に対応していることが必要となる。しかし、オンラインを用いて退院時共同指導の現状については、十分に明らかにされていない。

(2) 事業内容・経過

オンラインを使用した多職種による退院時共同指導の現状と課題を明らかにすることを目的に、①医中誌 Web を用いた文献検討、②神戸市内の病院および訪問看護ステーションでのヒアリングを行った。また、③「COVID-19 禍における神戸市内訪問看護ステーション現状調査」の結果から、オンラインを活用した退院時カンファレンスを行った訪問看護ステーションの背景要因について検討した。

(3) 業務成果・実績

①では、「退院時共同指導」もしくは「退院時カンファレンス」と「オンライン」もしくは「ICT」を掛け合わせて文献検索を行ったが、該当する文献は0件であった。また、「退院時共同指導」のみでは76件、「退院時カンファレンス」のみでは48件の文献が該当したが、抄録等を確認したところ、自施設内のみの退院指導やICTの導入効果を解説した内容であり、オンラインを活用した多職種による共同指導の実際に関する内容は見当たらなかった。

②では、神戸市内の病院5件、訪問看護ステーション7件の計12件のヒアリングを行った。そのうち、オンラインでの退院時共同指導に参加した経験のある施設（以下、参加施設）は6件（病院4件、訪問看護ステーション2件）、参加した経験のない施設（非参加施設）は6件（病院1件、訪問看護ステーション5件）であった。

参加施設の病院（4件）は、月に4～14件のオンラインでの退院時共同指導を実施しており、主な指導内容は「入院時の経過報告」と「今後の方針確認」が中心であった。また、

医療連携が中心となるため、参加者は患者・家族、病院側関係者、在宅側医師・訪問看護師・ケアマネジャーがほとんどであった。さらに、オンラインでの退院時共同指導のメリットとして、急な依頼でも在宅側の施設スタッフに参加してもらいやすい、忙しい在宅側の医師が参加しやすいことがあげられていた。その反面、デメリットとして、在宅側の施設でオンライン環境がない、オンラインに不慣れである、日程調整等を担当できる人がいない場合には参加が得られにくいことがあげられていた。

参加施設の訪問看護ステーション（2件）は、これまで2～3件のオンラインでの退院時共同指導に参加しており、主な指導内容は病院同様に「入院時の経過把握」「今後の方針確認」が中心であった。また、オンラインでの退院時共同指導のメリットとして、感染状況に関わらず紙面以外の患者情報等が得られる、移動時間がかからないことがあげられていた。その反面、デメリットとして、患者や病棟看護師の参加がない場合や家族もオンラインでしか面会できていないケースでは、患者が帰宅後に困惑や混乱をすることがあることがあげられていた。

非参加施設の病院（1件）、訪問看護ステーション（5件）では、行っていない背景として、オンラインでの退院時共同指導の依頼がないという理由が最も多かった。また、オンラインでの退院時共同指導の懸念として、個人情報漏洩や個室がないといった環境面での不安や、在宅側が情報としてほしいと思っている患者や家族からの直接の情報が得られにくい（ニュアンスが伝わりにくい）などがあげられていた。また、オンラインでの必要性をあまり感じなかった（感染状況に関わらず対面での退院時共同指導が可能であった）という意見もあった。

③では、調査結果から、神戸市西部地区の訪問看護ステーションがオンラインによる退院前カンファレンスが増えたと回答していたことが明らかとなった。また、オンラインを活用した退院時カンファレンスを行った訪問看護ステーションの背景要因には、訪問看護ステーションの所在地が須磨区、垂水区、西区であること、看護師常勤換算数が多いこと、経営状態が黒字であること、機能強化型を算定していること、所在地の医療介護サポートセンターの活動に参加していることが関連している可能性が考えられた。

（４） 来年度の展望

以上の結果から、調査結果やオンラインでの退院時共同指導のメリットとデメリットを周知するとともに、オンライン環境がない、オンラインに不慣れである、日程調整等ができる人がいないといったデメリットを改善する仕組みづくりを行っていく。

IV 国際交流グループ

1. グループ概要

本学の国際交流活動は、2020年度までは常設委員会の一つである国際交流委員会がこれを担い、2021年度からはいちかんダイバーシティ看護開発センター内の国際交流グループにおいて企画・運営が実施された。

コロナ禍における国際交流上の最大の影響は、長年にわたり本学恒例となっていた人気科目「海外看護学研修」が3年連続で非開講となったことである。この科目は本学と学術協定を締結している米国ワシントン大学（シアトル）およびベトナム・ダナン大学へ1～2週間程度の短期間、学生らが現地に赴いて見学・視察や語学研修、看護演習等を行うというものであった。自分の目で見たり聞いたり触れたりするという形で海外を経験することが叶わないのは、当然のことながら甚大なる機会の損失である。しかしながら、そのコロナ禍であればこそ新たな試みにチャレンジできた、と言える側面もあった。それがオンライン形式による講演会ならびに学生どうしの交流会であった。以下はそれらを含めた2021年度国際交流活動の報告である。

2. グループメンバー

加藤憲司、グレッグ美鈴、山内理恵、林千冬、クロスビ・アダム、嶋澤恭子、樋口佳耶

3. 今年度の実施内容及び実施結果

(1) ベトナム・ダナン大学との学術協定の更新手続きの開始

本学の学術協定（MOU）提携校の一つであるベトナム・ダナン大学との協定が満5年を迎え、このたび更新手続きを開始した。次項に示すように、同大学との交流は年々活発化しており、コロナ禍において本学の国際交流の基軸となっている。

(2) ベトナム・ダナン大学とのオンライン交流イベント

ベトナムのダナン大学看護学部との学生交流イベントを2021年1月25・26日、および翌2022年1月17日にオンライン実施した（後掲のリーフレットを参照）。ダナン大学からは学部長を初め、多数の看護学科教員や学部学生らの参加を得ることができた。

特に2022年のイベントにおいては、まず前半に両大学の教員によるコロナ禍における看護教育に関するプレゼンテーションとディスカッションを、後半には両大学計5グループからコロナ禍における授業や演習の経験について交互にプレゼンテーションとディスカッションを、それぞれ実施した。参加者数は学外者を含めて250名以上を数え、3時間30分にわたり非常に熱心で活発な質疑応答や意見のやり取りが行なわれた。人数や時間の制約が大きい現地研修に比して、オンライン交流の効率性や利便性などの優越性を実感することができ、大変収穫の多いイベントであったと評価できるものと言える。

IV 国際交流グループ

いちかんダイバーシティ看護開発センター 通訳つきです！ 定員 300名
国際交流グループ主催

オンライン交流会 with ダナン大学(ベトナム)
COVID-19流行下における看護学教育

Online-exchange program between KCCN and UD
About Nursing Education during the Covid-19 epidemic

【日時】2022年1月17日(月)15:00~18:00

【内容】
①両校の教員による実践報告(COVID-19流行下における授業、講習、実習等)
②両校の学生によるプレゼンテーション(COVID-19流行下における学生生活)
③参加者のディスカッション
昨年からのCOVID-19流行下での両校の看護学教育の状況を共有する機会といえます。昨年度は授業の一環としてオンライン交流をしています。詳しくはこちら

【開催方法】オンライン(zoom 使用)
【対象】どなたでも無料で参加できます
*神戸市看護大学教職員・学生は、申し込みは不要です

*学外の方は、(1月13日(木)17:00まで)に、次のURLあるいはQRコードから参加申し込みをお願いします。
<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSeenReTMQ0wCjy7BosnkiLk3d07nF7K9REH8Caxi3w/viewform>
お申し込みいただいた方には、zoomのURLをお送りします。
*その他、ご不明点はお問合せください。

F 651-2103 神戸市西区学園南2-4 神戸市看護大学 事務局
TEL:078-794-8085 E-mail:chilik@kobe-ccn.ac.jp

神戸市看護大学はダナン大学と学協定を締結しています

プログラム(予定)

15:00~15:10 開会 **本学からは船木先生にご登壇いただきます！**

【第1部】15:10~17:00 教員からの実践報告
15:10~16:00 神戸市看護大学 急性看護学分野 講師 船木淳 先生
16:00~16:50 ダナン大学 看護学科 講師 Vo BaNghia 先生
16:50~17:00 質疑応答、意見交換

【第2部】17:00~17:55 学生セッション
17:00~17:30 学生からのプレゼンテーション
①ダナン大学、②神戸市看護大学
17:30~17:55 参加者間のディスカッション

17:55~18:00 閉会 **本学の2年生、4年生が発表します！**

(3) English Lunch Time / English Extra

本学の学生、院生、教職員が気軽に英会話を楽しめるよう、2019年度秋より週1回、昼休みの30分を活用した英会話の時間、English Lunch Timeを開始した。しかし、2020年冬のコロナ感染拡大に伴い、集団でおしゃべりをしながら昼食を取ることが難しくなった。そこで、対面の開催では参加者にマスクの着用とソーシャル・ディスタンスをお願いし、参加時間は飲食を控えてもらった。また、学生たちが在宅で遠隔授業を受けている期間はZOOMでの入り口も作成し、ハイブリッド形式で開催した。2021年秋には、参加者がイベント中に昼食を取れないことを考慮して、イベント名をEnglish Extraに変更した。参加人数はコロナ以前に比べると減少したが、それでも英会話を希望する学生、院生、教職員のために学期期間中はほぼ継続して英会話実践の機会を提供し続けた。

Get Ready for the Extra!

English Extra!

水曜日のお昼休みに英語を話しませんか? Adam Crosby 先生を中心に English Extra を開催します。奮ってご参加ください。

開催日: **10月6日、13日、20日、27日**
11月10日、17日、24日
12月1日、8日、15日、22日、
1月5日、12日、19日、26日

開催時間: 12時30分から13時まで
場所: 本部研究棟3階オープンスペース(対面の場合)
(オンライン実施の場合は後日 URL をお伝えします。)

※ 対象者は本学の学生、院生、教職員です。
※ コロナ対策のため、対面の場合は**必ずマスクを着けて**の参加をお願いします。
また、**飲食もお控え**ください。



V 保健師キャリア支援センターグループ

公衆衛生看護学分野 岩本里織
いちかんダイバーシティ看護開発センター 磯濱亜矢子
公衆衛生看護学分野 山下正、藤岡神奈、遠藤真澄

1. 保健師キャリア支援センター開設の経緯

保健師キャリア支援センターの開設のきっかけとなったのは、2019年の年末ごろから神戸市保健局と本学において、神戸市の保健師人材育成に対する本学の支援を検討したことからである。その中で人材育成の支援のためには人員と予算確保の必要性から医療介護総合確保基金への申請が提案された。その後、兵庫県健康増進課等とご相談し、神戸市のみではなく県下全体の保健師の人材育成を実施するために、地域医療介護総合確保基金事業を申請し、2021年4月から兵庫県保健師キャリア支援センターの事務局を本学で担うこととなった。

保健師キャリア支援センターは

- 1) 保健師人材育成研修の実施
- 2) 公衆衛生看護等に資する調査研究
- 3) 保健師キャリア支援
- 4) その他、保健師の資質向上に関する事業の実施

等を担っている。

本報告書においては、上記 1)-4)の活動について述べる。

2. 保健師人材育成研修の実施

(1) 新任期保健師研修会(1年目)

- 1) 開催日時・場所：2021年12月13日(月) 10:30～16:00 オンラインにて開催
- 2) 研修内容：テーマ「個別支援」
 - ①講義「個別支援」
講師 神戸大学大学院保健学研究科 和泉 比佐子教授
 - ②講話「2年目保健師として伝えたいこと」
講師 兵庫県多可郡多可町健康課 村上 裕香保健師
 - ③グループディスカッション
テーマ「日頃の活動の振り返り」及び「個別支援」
- 3) 参加状況：57名参加（健康福祉事務所 15名、中核市 14名、市町 28名）

(2) 新任期保健師研修会(2~3年目)

- 1) 開催日時・場所：2021年12月17日(金) 10:30～16:00 オンラインにて開催
- 2) 研修内容：テーマ「地域診断と保健事業」
 - ①講話「新任期保健師に伝えたいこと～これまでの保健師活動を振り返って～」

講師 明石市福祉局生活支援室発達支援課 福岡 彩美 保健師

②講義 「地域診断と保健事業」

講師：神戸大学大学院保健学研究科 和泉 比佐子教授

③グループディスカッション

テーマ「地域診断と保健事業の展開について」

3) 参加状況：87名参加（健康福祉事務所 15名、中核市 29名、市町 43名）

(3) 保健師現任教育計画作成及びプリセプター研修会

1) 開催日時：2021年11月29日（月）13:30～16:30 オンラインにて開催

2) 研修内容：

①講義 「新任期保健師教育におけるプリセプターシップ～個別支援を大切にした保健活動の展開に向けて～」講師：武庫川女子大学 和泉 京子教授

②グループワーク：

テーマ「個別支援を大切にした保健活動の展開に向けたプリセプターの役割とは？」助言：武庫川女子大学 和泉 京子教授、他

3) 参加状況：55名（健康福祉事務所 21名、中核市 4名、市町 30名）

(4) 統括期保健師研修会

1) 開催日時：2022年3月18日（金）10:00～16:30 場所:神戸市看護大学

2) 研修内容：

①講義 「統括期保健師の役割や機能・期待する役割」「行動計画立案（課題・目標）」「実践の評価」 講師 神戸市看護大学看護学部 岩本 里織教授

②講義 「統括保健師の実践」

講師 兵庫県健康福祉部 柳瀬 厚子参事

3) 参加状況：3名（県庁 1名、中核市 1名、市町 1名）

3. 公衆衛生看護等に資する調査研究

今年度予定していた研究については、倫理審査の承認が遅れ、次年度に継続実施となった。

4. 保健師キャリア支援

(1) 保健師キャリア相談

1) 保健師キャリア相談の概要

本事業は、保健師活動や保健師のキャリアアップに関する相談に応じることで、保健師活動の資質向上および離職防止につなげることを目的に実施した。

対象は、兵庫県内の保健師（保健師免許保有者）であり、相談内容は、保健師活動に関する具体的な相談（事業、個別支援等）、スキルアップに関すること、キャリアラダーに関すること、保健師活動に関する調査研究に関すること、その他保健師活動に関すること、など保健師活動に関する相談全般である。

相談日は、定例で毎月第3水曜日 13:00～20:00 とするが、それ以外の日時も相談に応じ

ることとし、相談方法は、面談（来所・遠隔）または電話とした。

2) 保健師キャリア相談の実績

下記の表のとおり

2021年度 保健師キャリア相談実績(県全体)			
番号	相談方法	相談概要	継続の有無
1	面談	所内の人材育成	有
2	面談	所内の人材育成	有
3	メール	研修会講師の紹介	無
4	面談	所内の人材育成	有
5	面談	所内の人材育成	有
6	面談	個別事例の支援相談	無
7	面談	所属機関の保健師のキャリアラダーの開発	有
8	面談	所内の人材育成	有
9	電話	新任期保健師研修会(交流会)の企画について	無
10	面談	所内の人材育成	有
11	オンライン面談	自身のメンタルヘルスと今後のキャリアアップについて	未定

(2) オンデマンド研修

本事業は、新型コロナウイルス感染症禍で市町村間の保健師による直接的な情報共有の場がなく、活動方法を模索している方も多い。そのために、兵庫県内の先駆的活動や特徴的活動を実施している自治体やその活動を取り上げ、オンデマンドで活動紹介を行うことを目的とした。

方法：兵庫県保健師キャリア支援センターホームページ内のオンデマンド研修視聴サイトからパスワード入力での視聴ページへ遷移し、視聴する。

今年度下記の内容について実施した。

1) ストレスマネジメント研修

- ①テーマ：ストレスフルな状況下においてポジティブ思考につながる実践方法
（自分へのいたわりの気持ちを大切に）

講師：日本産業カウンセラー協会四国支部 五百竹 洋子支部長

- ②内容：コロナ禍の現在において、保健師は、通常業務に加え、新型コロナウイルス感染症流行特有の業務やそれに伴う長時間労働によるストレスにさらされることにより、精神的な不調を呈している者も少なくない。そこで、本研修では、保健師がセルフケア力を高め意欲的に保健師活動を実施できるように、レジリエンスとストレスマネジメントの基礎能力を養う。

- ③期間：2022年3月中旬頃から1か月間

2) 先駆的保健師活動の紹介

- ①テーマ：介護予防事業（フレイル対策）

②内容：神戸市における介護予防の取組(フレイルサポーター事業など)の紹介

③講師：神戸市福祉局介護保険課 田邊 尚子保健師

3) 新任期保健師の講話

① 2年目保健師の講話：テーマ：2年目保健師として伝えたいこと

講師：多可郡多可町健康課 村上 裕香保健師

② 4年目保健師の講話：テーマ：新任期保健師に伝えたいこと ～これまでの保健師活動を振り返って～

講師：明石市福祉局生活支援室発達支援課 福岡 彩美保健師

5. その他、保健師の資質向上に関する事業の実施

(1) 新型コロナウイルス感染症に関する映画上映会

兵庫県保健師キャリア支援センター事業の一環として、県内の看護学生、看護教員および保健師の皆様方に、新型コロナウイルス感染症に対する保健所や保健師の活動についてご理解を深めることを目的に下記の映画上映会を行った。

1) 実施日時：2021年11月22日(月)、2021年11月23日(火)

2) タイトル：『終わりの見えない闘いー新型コロナウイルス感染症と保健所ー』

3) 参加者：2日間計 95名

(2) 兵庫県保健師キャリア支援センターホームページの開設

兵庫県保健師キャリア支援センターが実施する「保健師人材育成研修」「保健師キャリア相談」に関するページを設定し、研修の情報、申し込みページ、キャリア相談の申し込みなどができる。また、「公衆衛生看護関連情報」を設置し、研修等の情報、県内の採用常用、調査研究・文献、公衆衛生看護の関連リンクなどを設け、情報提供している。

URL <https://kobe-phn-cc.jp/>

6. 2021年度の活動の振り返り

兵庫県保健師キャリア支援センターグループにおいては、当センターで実施する事業について兵庫県健康増進課等と協議しながら、企画・実施・評価を担っている。

特に「兵庫県人材育成研修」については、兵庫県全体の保健師人材育成計画に則り実施する研修である。新型コロナウイルス感染症流行下で、保健師の活動の重要性が高まる一方、多忙により現場での人材育成が困難になる中、外部機関による保健師の人材育成が非常に重要であろう。新任期から統括期までの研修の実施については、多くの講師の先生方のご協力により、多くの保健師の参加が得られ、充実した研修の開催となった。一方で、今年度は、センターの開設初年度であり、立ち上げ時期が遅れたため、研修時期が年度後半となり、参加者からは課題提出のスケジュールがタイトであるなどの課題をいただいた。次年度は、より計画的に進めていきたい。

保健師キャリア支援として、保健師キャリア相談事業は、相談者は少ないものの、保健師のキャリア開発や離職防止となる相談支援であった。新型コロナウイルス感染症に関する映画上映会においては、学内外の多くの大学関係者、保健師関係者などが参加いただき、盛況であった。新型コロナウイルス感染症に関する保健師の活動に関して理解を得るとと

V 保健師キャリア支援センターグループ

もに、新聞記事にも掲載したために、保健師キャリア支援センターの PR にも一役買ったようである。さらに兵庫県保健師キャリア支援センターホームページを立ち上げ、保健師活動関連の情報を掲載しているが、今後はさらに充実させ、保健師活動に役立つ情報が集約されたものにさせたいと考える。

今後も兵庫県保健師キャリア支援センターにおけるさらなる活動の充実を図りたい。

VI 地域保健支援グループ

神戸市の新任期人材育成支援

いちかんダイバーシティ看護開発センター 磯濱亜矢子
 公衆衛生看護学分野 岩本里織、山下正、藤岡神奈、遠藤真澄
 精神看護学分野 山岡由実

新型コロナウイルス感染症の流行の兆しが見え始めた 2019 年の年末頃から、保健所では健康危機管理対応が優先されるようになり、神戸市においても、保健師の量的確保に伴う採用数の増加に対応する人材育成の充実が課題となっていた。そのような中、神戸市から本学へ、本学公衆衛生看護学分野教員に神戸市の人材育成の支援について要望をいただいた。現状の公衆衛生看護学分野の人員のみでは対応が難しいことから、公衆衛生看護を専門とする人員確保のために、兵庫県の医療介護総合確保基金事業申請を検討した。また、神戸市におけるコロナ禍を契機とした健康問題の増加への先行的対策事業を受託することとなった。このような事業基盤を背景に、いちかんダイバーシティ看護開発センターの開設とともに、センター専任教員に公衆衛生看護を専門とする専門職員を確保することができ、今年度から神戸市の人材育成への協力を行うことになった。

1. 神戸市の保健師の人材育成に関する方策の検討

市全体または所属ごとの人材育成の現状と課題を共有した。新型コロナウイルス感染症の流行に対し、近年採用数が増加している。また、市全体の保健師の年齢や役職等の構成から中堅期の役割が重要であるが、中堅期はライフサイクルや業務において公私ともに最も多忙な時期であり、後輩の人材育成や保健師活動の伝承など、期待する役割を十分に発揮するのが難しい現状が続いている。また、新任期においても、採用前に描いていた保健師活動と現状のギャップから、保健師としてのモチベーションの継続が難しくかったり、さらに、採用前の職歴が多岐にわたるため、人材育成を一律に行うことが難しい現状など、コロナ禍以降顕著になってきている課題もある。

これらを踏まえて、中長期的な視点で神戸市の保健師の人材育成の仕組みを検討することとなり、協議を重ねている。

件数	支援方法	相談概要
1	面談	神戸市の人材育成に関する課題と方策の検討
2	面談	神戸市の人材育成に関する課題と方策の検討
3	面談	神戸市の人材育成支援の具体的方策及び中堅期・統括期の人材育成の課題と方策の検討
4	面談	所内の人材育成
5	面談	所内の人材育成
6	面談	所内の人材育成

2. 神戸市の新任期保健師の個別支援のスキルアップに関する支援

神戸市の保健師の新規採用の状況は、新卒、職歴を有する者（看護師、保健師等）、また、年度途中の採用等、近年、一人ひとりの状況に合わせて人材育成を行うことの必要性がより一層高まっている。さらに、健康危機管理対応や日常的な保健活動が優先されるため、新任期保健師への助言指導を丁寧に積み重ねることが難しい現状もある。

本学においては、いちかんダイバーシティ看護開発センターの公衆衛生看護を専門とする専任教員が神戸市内の複数の保健センターを担当し、個別支援のスキルアップのための支援を行っている。具体的には、主に週1回程度、担当する保健センターへ赴き、個別支援（家庭訪問）計画について助言指導を行い、対象者の了解が得られる場合は同行訪問も行っている。

件数	支援方法	相談概要
1	面談	個別事例の支援相談
2	同行訪問	個別事例の支援相談（新生児訪問）
3	面談	個別事例の支援相談
4	面談	個別事例の支援相談
5	面談	個別事例の支援相談
6	面談	個別事例の支援相談
7	面談	個別事例の支援相談
8	面談	個別事例の支援相談
9	面談	個別事例の支援相談
10	面談	個別事例の支援相談
11	面談	個別事例の支援相談
12	面談	個別事例の支援相談
13	同行訪問	個別事例の支援相談（妊婦及び乳幼児訪問）
14	面談	個別事例の支援相談
15	面談	個別事例の支援相談

3. 2021年度の活動の振り返り

近年のコロナ禍の影響は、保健師の量的確保においては充足の契機となったが、プリセプター等指導保健師の対応が追い付かず、また様々な職歴を有する者が混在する等、系統立った人材育成の体制整備が急務となる事態も生じさせた。保健師のメンタルヘルスも一層重視する必要がある、現場だけの対応では困難な現状に対して、大学という外部機関が基礎教育から現任教育へのつなぎを支援できることは有意義であると考えている。実際に、係長職の指導者からも「個別支援の基本について、自分達が経験上実施していることを理論的な観点から新任期に伝えることの必要性を再認識した」という意見もいただいた。このように、新任期保健師のみならず、指導保健師の支援にもつながる活動の意義は大きい。次年度も引き続き、人材育成ニーズに応える支援を行ってまいりたい。

Ⅶ 臨床看護連携グループ

1. グループメンバー

江川幸二、二宮啓子

澁谷幸、高山良子、船木淳、玉田雅美、山本陽子、新澤由佳、岩井詠美

2. 今年度の実施内容及び実施結果

(1) 効果的な教育方法に関する支援

臨床看護連携の窓口を設置し、兵庫県看護協会から効果的な教育方法に関する研修会の依頼があった。教員3名で研修内容を検討し、2月28日「オンライン研修を企画しよう！」のテーマで研修会を実施した。はじめに「集合研修を効果的に行うためのZoom活用のコツ」についてZoomの初歩的な機能、操作について説明を行った。その後、参加者がオンライン上から受講する立場となりグループワーク等を体験した。最後に受講生がオンラインから円滑に研修を受ける際に重要な「オンライン研修会ホスト側の操作と留意点」について解説を行った。53名の参加があり受講後のアンケート結果から概ね好評であった。

(2) 新人看護師教育に関する支援

兵庫県看護協会を介して支援依頼のあった西宮市立中央病院の看護実践支援室看護師長とオンラインによる面談を行った。看護師長より、同院の新人看護師教育や中堅以降の看護師への継続教育プログラムについて説明を受け、具体的な支援内容について検討した。

看護師長は、新人看護師の指導に関わる中堅以降のスタッフの教育が必要だと認識されていたが、自組織内ではその問題意識が共有されていないようであった。会議の結果、まずは同院看護部内（看護部長や師長会）で問題を共有してもらい、その上で大学が支援できる内容について一緒に具体化し、研修等を企画・実施していくこととなった。

(3) 新型コロナウイルスワクチン接種会場（ノエビアスタジアム神戸）における支援

5月に神戸市からの依頼を受け、兵庫県看護協会と連携して、新型コロナウイルスワクチン接種会場におけるワクチン接種に関する看護業務への支援として、6月～11月までのワクチン接種業務、予診補助・接種補助業務を行う看護師の勤務の調整を行った。その結果、ワクチン接種従事者として、6月1日～11月30日まで、大学院生15名、編入生6名、教員2名の計23名をノエビアスタジアムでワクチン接種を行っている日は、毎日2名ずつ派遣した。

(4) 4年生の卒業前技術演習

卒業前の4年生を対象に、教員のサポートを得ながら希望する看護技術の練習を行うことができる機会として、2日間の看護技術フォローアップ研修を企画して参加者を募った。3月7日(月)は4名の学生がバイタルサイン測定・採血・点滴(薬液混注・滴下調整)の練習を行い、3月8日(火)は2名の学生が包帯・採血・清拭・洗髪の練習を行った。参加した学生は、「忘れていたこともあったので実施してよかった」「(就職への)不安はあるが少し安心した」と話していた。

(5) 2022年度看護専門職講座についての計画立案

看護師が日々の実践を振り返る機会となることをねらいとして、ベッドサイドの倫理的課題をテーマとする講座を企画した。講師として、看護倫理や看護技術関連の書籍を多数発表されている看護系大学教員に登壇いただけるように交渉し内諾を得た。今後、講師と具体的内容を検討したうえで2022年度11月頃に開催する。

(6) 就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業

文部科学省の令和3年度補正予算事業である、「医療・介護分野のリカレントプログラムの開発・実施」事業に応募するために、全学的にプロジェクトメンバーを集めて応募・実施計画を策定中である。過去に同事業の採択を受けてリカレント教育を実施している他大学の情報等を収集し、すでにプロジェクト会議を2回開催して、本学ならではの案を検討してきた。今後、文部科学省の公募説明会が3月に予定されており、具体的な内容説明をもとに、すぐに応募できるように準備を進めているところである。

Ⅷ 災害看護グループ

慢性病看護学分野 池田清子

公衆衛生看護分野 岩本里織

在宅看護学分野 宇多みどり

いちかんダイバーシティ看護開発センター水川真理子

1. グループ概要とメンバー

災害看護グループは、災害や新たな疾病等の健康危機に備え、災害時における福祉避難所の支援などの本学の役割の検討を含め、災害看護における教育・研究・実践活動を行うグループとして結成された。2021年度の主な活動は、コロナ禍で本学が行う地域の保健医療への貢献（神戸市の保健センター・軽症者等宿泊療養施設への支援の調整）を行った。また、災害への備えとして、まちの減災ナース指導者養成研修への本学教員の参加と、日本看護系大学協議会の災害支援対策委員会の関西・近畿ブロック：兵庫小ブロックのリーダー校としての取り組みを通じて、本学及び兵庫ブロックの防災・減災に関する現状とニーズを把握し、今後の課題を明らかにした。

2. グループメンバー

リーダー：南裕子

メンバー：池田清子 岩本里織 加藤憲司 山岡由実 宇多みどり 山下正
畑中あかね 水川真理子 後藤由紀子

3. 2021年度の取り組み内容と結果

(1) 有志教員による神戸市保健所・保健センターの支援

神戸市保健所への本学の支援は、2021年1月から開始している。本学の有志看護教員が、保健所・保健センターに出務し、積極的疫学調査の実施、自宅療養者等の電話での健康観察、療養期間終了の電話等を実施している。看護教員のみならず、看護職の経験がある編入生や大学院生の協力も得られており、2021年度は、2021年4月から2022年2月までに教員・大学院生29名が、延べ236回の支援を行った。

また、兵庫県看護系大学協会の検討により、県下保健所の支援を行う担当大学が決められ、本学が神戸市保健所・保健センターに協力を申し出る県下3大学の出務調整を行っている。

(2) 有志教員による新型コロナウイルス感染症軽症者等宿泊療養施設への支援

神戸市の軽症者等宿泊療養施設への神戸市看護大学の支援は、神戸市からの施設の設置に向けた協力依頼を受けて、立ち上げ時から出務し、神戸市保健師と共に宿泊所看護業務マニュアルや入所者用パンフレットの作成などに協力してきており、現在まで継続している。2021年度は、本学出務者が夜勤リーダー業務を担うなどし、支援が必要な時に出務している状況で、教員4名と大学院生2名が延べ40回出務し業務にあたった。感染拡

大時には、病院の病床数が不足するため、軽症者のみならず、酸素投与やモニタリングが必要な方や、介護を必要とする方も入所されるため、必要に応じた看護ケアを実践している。

(3) まちの減災ナース指導者養成研修への参加とフィールドワーク調査

災害看護に関する教育・研究・実践活動の一環として、まちの減災ナース指導者養成研修へ、宇多みどり講師が参加している（全 5 日間）。まちの減災ナース指導者とは、災害時に備え、地域や学校、職場等における減災に関する研修会や訓練等で看護の視点を踏まえた知識や技術の普及を行う「まちの減災ナース」を育成する指導者のことである（日本災害看護学会）。

研修で減災に関する基礎知識を学び、その後フィールドワークとして、本学における防災・減災に関する現状とニーズについてインタビュー調査を実施した。調査内容は、地域の特性やハザード、防災・減災に関する業務内容、防災組織計画に関する内容等で、防災に関する担当職員 2～3 名にグループインタビュー（2022 年 1 月 21 日、90 分間）と、防災・減災関連設備等の視察（2022 年 1 月 28 日、90 分間）を行った。その結果、通信機能や水・食料等の備蓄状況が確認でき、防災組織計画は指揮命令系統や発生し得る災害に沿った対応が計画されその経緯の説明を受けた。防災組織での各班員の役割において脆弱な点があり具体的に検討する必要性が認められた。

今後は、フィールドワークの結果を学内で報告し、個々の防災・減災意識の向上（自助）に向けた啓発活動を検討する。また、周辺地域での「まちの減災ナース」育成に向けたプログラムを検討していくこととする。

(4) JANPU の活動

日本看護系大学協議会の災害支援対策委員会より、災害時においても教育を維持するために平時より大学間のネットワークの構築が重要であるとのことから、全国の加盟校を対象に、6 つの広域ブロック（北海道東北、関東、中部、関西・近畿、中国・四国、九州・沖縄）に区切る考え方が公表された（2021 年 2 月 6 日）。その後、各校の代表者（本学代表・池田清子教授）が集まり関西・近畿広域ブロックをさらに小ブロックに分けるための協議がなされた。救援を考慮した交通アクセス等の観点から、関西・近畿ブロック（47 校）は、「大阪・和歌山」「三重」「京都・滋賀」「兵庫」の 4 つの小ブロックに編成することになった（3 月 8 日）。

その後、兵庫小ブロック（14 校）は 6 月に会議を開催し、2021 年度のリーダー校（神戸市看護大学）と副リーダー校（兵庫医療大学）を決め、任期は 1 年とした。9 月は Zoom による会議を開催し、新型コロナウイルス感染症への救援状況や災害看護教育の現状等を共有した。11 月には「7 時 50 分に神戸市に震度 7 の地震が発生し、広い地域でライフラインに影響が出ている。京阪神地域および播磨南東部地域は震度 6 である。」とのシナリオを作成し、各校に Google form にて被害状況と支援ニーズに関する調査を行った。

12 月にはこのシミュレーションの結果およびこれまでの会議の内容を踏まえ、災害時に教育を継続するための課題と災害看護支援委員および JANPU への要望を明確化し、広域ブロック長に報告した。主な要望は、「支援ニーズと資源をつなぐ、簡便な情報システ

ムが必要であり、JANPU に情報システムの作成をお願いできないか。広域災害救助医療情報システム EMIS の教育版があれば良い。その際、システムダウンも想定に入れる必要があるのではないか。」であった。

2022年2月6日には、災害支援委員会企画の災害フォーラムが開催され、話題提供として三重県の事例と中国ブロックの取り組み状況が報告された。今後も、全国規模と広域ブロック、小ブロックが有機的に連携し、災害時の教育継続にむけて話し合いを継続する予定である。



業績一覽

教員研究業績一覧(2021年度)

論文

- (1) 秋定真有, 水川真理子, 稲垣真梨奈, 石橋信江, 西村康子, 坪井桂子 (2021): コロナ禍で看護大学が実施するオンラインによる「もの忘れ看護相談ミニ講義」. コミュニティケア 23(11), 31-35

学会発表

- (1) 水川 真理子, 西村 康子, 畑中 あかね, 藤岡 神奈, 岩本 里織, 横田 香七恵, 堤 典江 (2022): 新型コロナウイルス (COVID-19) 軽症者宿泊療養施設での看護実践における困難. 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (2) 水川 真理子, 岩本 里織, 野寄 亜矢子, 西村 康子, 高田 大樹, 藤岡 神奈, 山本 陽子, 清水 千香, 畑中 あかね, 片倉 直子, 堤 典江, 横田 香七恵 (2021): COVID-19 軽症者療養施設に従事する看護職者の心理社会的状態と職務困難感: 質問紙調査. 第41回日本看護科学学会学術集会, オンライン開催
- (3) 秋定 真有, 水川 真理子, 稲垣 真梨奈, 石橋信江, 西村 康子, 坪井 桂子 (2021): コロナ禍におけるもの忘れや認知症に不安をもつ人々へのオンラインを活用した看護大学による支援の検討. 第41回日本看護科学学会学術集会, オンライン開催
- (4) Mizukawa Mariko, Iwamoto Saori, Noyori Ayako, Nishimura Yasuko, Takada Hiroki, Fujioka Kanna, Yamamoto Yoko, Shimizu Chika, Hatanaka Akane, Katakurra Naoko, Tsutsumi Michie, Yokota Kanae (2021): Questionnaire survey of nurses engaged in accommodation facilities for mildly ill people who are positive for COVID-19 -Focusing on the motivation, fulfillment, and rewardingness of nurses-. 3rd Technological Competency as Caring in the Health Sciences, Online
- (5) 岩本 里織, 山下 正, 水川 真理子, 藤岡 神奈, 遠藤 真澄(2022): 新型コロナウイルス感染症に対応する保健師の心理的健康度について. 第10回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (6) Saori Iwamoto, Tadashi Yamashita, Mariko Mizukawa, Kanna Fujioka, Masumi Endo(2022): Competencies required for public health nurses when responding to coronavirus disease 2019 infections. 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing.
- (7) 片倉 直子, 山崎 和代, 岩崎 美智子, 水川 真理子, 稲垣 真梨奈, 丸尾 智実(2021): COVID-19 第3波禍における訪問看護事業所管理者の心理状況とその関連要因. 第80回日本公衆衛生学会総会, オンライン開催

- (8) 岩本 里織, 山下 正, 水川 真理子, 藤岡 神奈, 船越 明子, 坪井 桂子, 加藤 憲司, 遠藤 真澄, 片倉 直子, 小山 富美子(2021): 新型コロナウイルス感染症流行禍の住民の心の健康について. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (9) 藤岡 神奈, 岩本 里織, 水川 真理子, 山下 正, 遠藤 真澄, 加藤 憲司, 片倉 直子, 船越 明子, 坪井 桂子, 小山 富美子(2021): 新型コロナウイルス感染症流行禍の住民の人との交流の実態について. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (10) 水川 真理子, 岩本 里織, 山下 正, 藤岡 神奈, 船越 明子, 坪井 桂子, 加藤 憲司, 遠藤 真澄, 片倉 直子, 小山 富美子(2021): 新型コロナウイルス感染症流行禍の住民の健康状態と受診行動について. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (11) 山下 正, 岩本 里織, 水川 真理子, 藤岡 神奈, 遠藤 真澄, 加藤 憲司, 片倉 直子, 船越 明子, 坪井 桂子, 小山 富美子(2021): 新型コロナウイルス感染症への恐怖と感染予防行動について. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催
- (12) 坪井 桂子, 岩本 里織, 山下 正, 水川 真理子, 岡 神奈, 遠藤 真澄, 船越 明子, 小山 富美子, 片倉, 直子, 加藤 憲司(2021): 新型コロナウイルス流行下の高齢者の健康に関する調査(報告 3) 認知機能低下の自覚ともの忘れの不安. 第 41 回日本看護科学学会学術集会, オンライン開催
- (13) 山下 正, 岩本 里織, 水川 真理子, 坪井 桂子, 岡 神奈, 遠藤 真澄, 船越 明子, 小山 富美子, 片倉 直子, 加藤 憲司(2021): 新型コロナウイルス感染症流行下における高齢者の健康に関する調査 (報告 2) フレイルとコロナ恐怖の実態. 第 41 回日本看護科学学会学術集会, オンライン開催
- (14) 岩本 里織, 山下 正, 水川 真理子, 坪井 桂子, 岡 神奈, 遠藤 真澄, 船越 明子, 小山 富美子, 片倉, 直子, 加藤 憲司(2021): 新型コロナウイルス感染症流行下における高齢者の健康に関する調査(報告 1) 感染予防行動と感染 への不安.

その他

- (1) 坪井桂子, 石橋信江, 秋定真有, 西村康子, 水川真理子 (2021): 増える認知症への懸念 広がるオンライン活用 コロナ禍で高齢者の孤立防げ. 神戸新聞, 2021年4月3日. <https://nordot.app/750917487928770560?c=110564226228225532>



センターの組織

2021年度いちかんダイバーシティ看護開発センター組織

センター長 南 裕子
副センター長 岩本 里織
片倉 直子

地域連携グループ

	氏名	所属
リーダー	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	苦田 ひとみ	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ<オンライン看護相談班>

	氏名	所属
統括責任者	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
リーダー	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	グレッグ 美鈴	基盤看護学領域 看護キャリア開発学分野
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	坪井 桂子	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	嶋澤 恭子	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	小山 富美子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	関口 瑛里	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	苦田 ひとみ	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	宮島 朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

健康支援グループ<慢性疾患重症化予防オンラインナーシング班>

	氏名	所属
リーダー	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	谷 知子	専門基礎科学領域 医科学分野
	石橋 信江	健康生活看護学領域 老年看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	苫田 ひとみ	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	宮島 朝子	いちかんダイバーシティ看護開発センター

在宅ケア支援グループ

	氏名	所属
リーダー	片倉 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	小山 富美子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	丸尾 智実	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	片山 修	人間科学領域 自然科学分野
	宇多 みどり	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	大瓦 直子	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	苫田 ひとみ	いちかんダイバーシティ看護開発センター

国際交流グループ

	氏名	所属
統括責任者	南 裕子	いちかんダイバーシティ看護開発センター長
リーダー	加藤 憲司	専門基礎科学領域 健康科学分野
	グレッグ 美鈴	基盤看護学領域 看護キャリア開発学分野
	山内 理恵	人間科学領域 言語科学分野
	林 千冬	基盤看護学領域 看護管理学分野
	グロスビ アダム	人間科学領域 言語科学分野
	嶋澤 恭子	健康生活看護学領域 ウイメンズヘルス看護学分野
	樋口 佳耶	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

保健師キャリア支援センターグループ

	氏名	所属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	藤岡 神奈	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野

地域保健支援グループ

	氏名	所属
リーダー	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	磯濱 亜矢子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	藤岡 神奈	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	遠藤 真澄	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野

臨床看護連携グループ

	氏名	所属
リーダー	江川 幸二	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
リーダー	二宮 啓子	療養生活看護学領域 小児看護学分野
	澁谷 幸	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	船木 淳	療養生活看護学領域 急性期看護学分野
	高山 良子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	玉田 雅美	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	新澤 由佳	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	岩井 詠美	基盤看護学領域 基礎看護学分野
	山本 陽子	療養生活看護学領域 小児看護学分野

災害看護グループ

	氏名	所属
リーダー	南 裕子	いちかんダイバーシティ看護開発センター長
	池田 清子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	加藤 憲司	専門基礎科学領域 健康科学分野
	岩本 里織	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	山岡 由実	健康生活看護学領域 精神看護学分野
	畑中 あかね	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野
	山下 正	健康生活看護学領域 公衆衛生看護分野
	宇多 みどり	療養生活看護学領域 在宅看護学分野
	水川 真理子	いちかんダイバーシティ看護開発センター
	後藤 由紀子	療養生活看護学領域 慢性病看護学分野

神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター

2021 年度実績報告書

発行日 2022 年 6 月 1 日
発行者 公立大学法人 神戸市看護大学
〒651-2103 神戸市西区学園西町 3-4
TEL 078-794-8080 FAX 078-794-8086
編集 神戸市看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター
表紙デザイン 手島美華
ISBN 978-4-9909462-2-7

©公立大学法人神戸市看護大学 無断転載を禁じます。

